

ふべからず。新しく踏出す力は絶望の底より生るゝものにして、眞に死に切る人は眞に生き切る人でありませぬ。佛の謂ゆる「大死一番大活現成」にして死を決行するにあらざりて死中に生を決するのであります。更に換言すれば無意義なる生の無益にして、無意義なる死の有害をいふのであります。トルストイ曰く「吾が宗教は眞に生きんと、するならば死ぬることである」と即ちこれより生き還つて新しき生涯に入るとの意味であります。又或る先哲曰く「運命を活かせよ」と眞に味ふべき言であります。以上は意氣込に就て申したるものにして決して猪突にあらず、何人も日々新たに進む上には進むや其の序に脩ひ、新たにするや其の中を執ることの忘るべからざることは勿論であります。

佛教では因縁といふことを申しますが、因あれば縁あり兩者相離るべからざるものと存じます。縁例へば畠のみありても因たる種子が無ければ物は生ぜず、殊に其の種子にも良否があります。然るに今人は兎角自分の種子のことを棚に上げ

て縁の世を求め之を責め、之を怨む人が多いやうであります。縁の培養に依つて種子より芽が出て之が根となり幹となる。此の當然なる天然の理を理解せざるものにして、即ち因たる自分の力の發揮に努力せざるものといふべく、元來因自身が良ければ自然之に適したる良き縁を求めて安住の場所となすべく、之と同じく昔の英雄豪傑も自己の逆縁を踏破して独自の天地たる良縁を開拓したるものであります。即ち自因に依つて自果を得たるものにして、是れ亭々たる大樹となる所以であります。人生元來「誠」である因力と縁力とが相融合協和して完全に幸福が保たれるものであります。會社でも幹部と従業員とが一體となりて相和合するところに繁榮は招かずして來るものであります。願はくは徒らに他縁を求めず「誠」に坐して因果の大道を歩まんことを切に望むところであります。

さて日本の農業は元來決して世界に劣つては居りませぬが、近來人と土地との接觸が悪しくなり、都會の惡風に感染し、又自給自足であつた物質生活が急激に



金銭生活に變化した處に根本の悩みがあると存じます。固より時勢の變化推移に依り根本的に方向の轉換を考ふるは自ら別問題であります。今日の弊を矯めるには私は大地より派生して大地を敬愛するの根本に則り、農に居て農を敬し農に親しむの本源に立還り宜しく農に生くべしと唱導するものであります。

フランクリン曰く「立てる農夫は坐せる紳士よりも高し」と。所謂「汝は汝の道を歩め」「隨處に主を作す」でありまして己れに力強き獨立心あらば身は既に最高の地位に在るものにして決して他を羨み他を怨むの要なしと存じます。金を以て匡救することは益々土地と縁が遠くなり且つ依頼心を助長するものと考へます。寧ろ地方に事業を起して恰く動員せしめ、一面には都市と農村との負擔の不均衡を是正して農村に對し公課を減免することとなり、土地の直接保護方法を講ずるなり、或は物價高の抑制、消費税の輕減又は低金利を計ること、更に又積極的には從來の農業經營法を教へ計畫的組織的の新方法を授けて指導すること等國家

が救済するの道は自ら他に在り原料を豊富にするとか、小資本で出來ざるもの及利益の上らざるものを補助することにして、是は單に餓えたりとて救済金を交付するよりも遙かに生きたる恒久的救済方法にして實に根本問題なりと信じます。救済に過ぐれば懶惰の民を生じ、税重ければ勤儉の美風を擲つの結果を招くが故に爲政者たるもの夫れ難いかなであります。之に打ち克つには眞の力強き「誠」を積極的に活用するに在りと信じます。

昔時計の無い時代には星を戴いて出て星を戴いて歸り、行燈時代には夜業を爲したものが今や時を惜まらず又電燈の明るさに仕事をせず、經濟原理の勞少くとは即ち働かずして効果多きこと、横道に解釋し、又田舎の女子供乃至は草取りまでも腕時計を持たぬものがないといふ今日となりましては、却つて時を正しく用ひず時を尊重せず時を利用せず時の殺生を意とせず寧ろ油斷するの具となり、天日が高く昇りてから自轉車で田圃に行くといふ空費の結果となり、時計の増加と時



の亂費との正比例は恰も法律の増加と法の亂用とが正比例し正義の本道を離るゝこと多き有様と同一であります。萬物悉く靜止せざる中にも殊に時は瞬時をも息まず所謂「汝の生涯は汝の時より成立つ」のであるにも拘はらず之を忘るゝもの多し。新式の器具機械は能率を擧げ収益を増加せしむべき筈なるに、折角高價を以て買入れたるものも偶々自己の勞力を省くに止まるのみにては、寧ろ自力更正の意義を没するの具となるにあらざやと存じます。來年のことは兎も角、今日この今の時、勤むることが人生の本務として大切なることを忘れてはなりません。

この秋は雨か嵐か知らねども

今日の勤めの田草取るなり

又邊僻な漁村の漁師が、大都會のデパートから流行の衣裳を通信販賣で求め、或は質素と勞働とを以て古來一種の美風と稱せられたる八瀬大原の娘が、平常に

錦紗の着物をべらく纏ふと云ふ上走りの有様に急に變つて來たといふことは、之が進歩でありませうか。將又退歩でありませうか。此の潮流の心理状態は果して何と評すべきでありませう。今日社會の風潮は何處に質實剛健の實があり、何處に質素儉約の良俗美風が行はれて居りますか、寧ろ浮薄贅澤に走つて生活費が徒らに膨脹し爲に貧を訴へて居るのではありませぬか、是は生活向上とは似て非なるものであります。斯かる人は收支を考査し又家計簿を記載して居るものではないませぬ。人或は曰はん我々僅少の會計を記帳したりとて何んの役にか立たんやと、私は左にあらざ縦令僅少なりと雖家計を記帳する人は金を粗末にせざる締りのある自營の人にして、彼の掛買を爲し又は救濟を求むる人は恐らく收支計算を明かにせざる締りのなき人なりと申して間違なしと信じます。即ち救を求むる人は記帳せず、救を求めらるゝ人は却つて記帳を怠らざる人であります。されば家計簿は獨立自營上眞實なる良友であります。



彼の米國に於て月賦拂で物を買はせた時代は一時華やかでありましたが、結局賣手も買手も失敗に終りたる實例は、畢竟度を超へ空に走りたる生活の罪にして斯る便宜を與ふることは人をして危険に導くものにして、基礎を養ふものとは相反し識者の採らざるところであります。私は眞面目なる生活をなさんと望まるとならば、分度經濟並に現金生活を勧め致します。此の頃も米國の百貨店の掛賣は不健康生活に導くにあらずやと云はれ之が又々問題となつて居ります。今日は兎角心が形に支配せらるゝ有様にして洵に遺憾と存じます。私は外形の進歩と心の進歩とが相並行する必要ありと考へます。元來土に親み地氣を受くることは心身共に健全となることは疑なき處であります。健康の低下を叫ぶものは宜しく心身の二者、就中心の治安に就て思を致すべきなりと存じます。醇朴なる村人に在つては割合に能く此の二者を有す、故に昔より大政治家になつたり大發見をしたる大事業を起す者、又は純眞なる志士は、皆地方の土に親めるものより生ると言

はれて居ります。健やかなる腕は大地を耕し健やかなる足は大地を力強く踏まへ健やかなる頭は大空の壯嚴なる冠を戴いてゐる。天日の下沸き返へる水田に立ち汗にまみれた勤勞さを見よ。「使ふ針は錆びず」働く中に味あり。炎天の木蔭に暫し眠る勞働者と金殿玉樓の中で睡眠不能に惱める有閑者と對照せば果して如何でありませうか、蓋し思ひ半ばに過ぎんと存じます。

農村振興は郷土愛より起るものにして同時に愛國心となるのであります。其の醇朴なる村人こそ實は國力の源泉たる質實剛健隣保互助の精神を供給し國民の基礎を作るものであります。一枚の木の葉能く木の命全體を支へると云へる如く、本當に心の力、身の力を打込むことが根本であります。美に誇るものは其れ丈け美を消します。實に就いたる美は永遠無量であります。日本は是等醇朴なる實ある人々の美に依つて支へられて居るものと謂ふべきであります。田園に歸りては耕作に力め一朝事あれば出でて身を捧ぐるは男子の本懐にあらずや。徒らに都會



に出でて半面の美を眺め其の生活振りを羨望し其の浮華に憧憬することは禁物であります。魅惑多き麻雀やカフェーに出入したり赤い灯や青い灯を見ることは決して純なる地方人の幸福ではありません。又こんな人は決して國を支へる柱とはなりません。此頃は動もすれば田舎にも赤い灯や青い灯が殖えるやうであります。が其の筋では之を何んと考へ見られて居りませうか。農村衰微の一原因は壯者が我もくくと都會に走り出づることによることなれば爲政者は尙更指導上此の點に就て大いに考慮を拂ふべきことにあらずやと存じます。私は田舎人は都會を見て發奮し、都會人は田舎を見て慎むといふ風を忘れないように致したいものと念願致します。

今日種々行はるゝ社會政策は固より必要であります。併し人間の守るべき本心は確と崩壊せざるやう最も留意することは今日の根本的急務なりと存じます。即ち自己を失はざることであります。此の頃農村の子女の多くは都會に嫁入したい

と希望しますけれども、紡績の女工に就て云ふならば農村に歸りて結婚したるものゝ方が事實遙かに幸福なりと云はれて居ります。都會は貧富兩面の對立せるところに於て日本一の金持もあれば亦日本一の貧乏人もあり、賢者愚者交々にして一概に渴仰する譯には参りませぬ。イットよ須らく郷里に還りて家庭の人となれよであります。農村に在つて詰らぬといふ者は都會に出でて亦詰らぬといふ者であり一事が萬事であります。即ち一事に不平不満を抱き其の職に飽くものは他方に轉じて亦同様の境遇たるに過ぎません。

元來農村は土地に限りありとは云へ同時に農民が左程殖えませぬ。之に反し都會は各地方より潮の如く流れ込み來りて農村の調整よりも遙かに困難であります。から都市問題は重大であつて決して等閑に出來ませぬ。尙私は農村救済の聲の大にして中小商工業者の救済の聲が比較的小なるは不思議に思はれます。農商工共に相俟つて並行して順調に進展すべきものと存じます。一にも二にも金を以て救



濟することは考へものにして、何んと言ふても根本的には矢張り心の建直しが第一の先行條件であります。是は限りあるものを以て救ふにあらずして、限りなき無上の救濟策を以てするものであります。金を與ふるよりも職を與へよ、職を與ふる前に先づ心を與へよであり、即ち人的中心であります。農村振興に就ては彼のデンマルクの例を見るの要ありと存じます。

我が東北地方よりも以上に農村として條件の悪しかりし彼のデンマルクでは、奮闘努力七十年の結果、遂に此の無資源の瘠地を變じて世界無比の高級農業國と化せしめ、千九百二十四年ジエネーヴの國際會議の席上、時の英國首相マクドナルドをして「今世界に於て最も理想に近き政治を爲して居るものは勞働者を首相とせるスタング内閣の治下にある北歐の小國デンマルクである」と絶讃せしめたる程であつて、今や豊かなる生活に恵まれ國民争つて土地を愛し土地に感激するの精神に充ち満ちて居る農業文化の先進國として燦然世界に光を放つて居るもの

は實にデンマルクであります。デンマルクは獨り農業のみならず工業に於ても例へば造船業の如きも何等原料の資源なきに拘はらず加工に精進し今や英米を凌駕するに至れりと云ふ有様にして即ち工夫研究の働きが富であります。滿洲に移住すれば翌日より直ちに地上に落ちたる富と寶を把むことを夢みたり、一にも救濟、二にも救濟と唱ふる初より他方本願を主とする人々よ、果して何れの時を期してか、獨立の更生の光明を見んとするでありますか。不退轉の勇氣を以て刻苦忍耐努力する事こそ眞の寶であります。諺に「稼ぐに追付く貧乏なし」といへる如く勤勉努力と質素儉約とを以てすれば必ず成功せざることなしであります。働かんとするも仕事なし宜しく仕事を與へて呉れよと据膳を冀ふものは、仕事を與へても決して働く人ではありません。又救濟を求むる人は決して奮闘努力する人ではありません。寧ろ日常不平を唱へて居る人であります。働く人は如何なる場所でも如何なる仕事でも働きます。畢竟己れの職業を愛する人は己を愛する



人であります。人々よ過去を省みて自分は復利的に晝夜不斷の精勵努力を續けて來たでありますか。更に問はん痛烈骨を刺す艱難と闘ふたことがあつたでありますか。恐らく満足なる確答は得られないであります。又更に問はん如何なる自任心を堅持するや。孟子は「大丈夫を以て自任せよ」と繰返して云はれて居りますが、大丈夫の定義には「富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、此れ之れを大丈夫と謂ふ」と云はれて居ります。味ふべきであります。

古來「借の一字は家を破る基なり」と云へる如く常に借り方生活を爲すことは人間の不幸であります。受けると云ふ觀念を有つことの戒めとして「受くるよりも與ふるは幸なり」と云ふ言葉がありますが、私は金を與ふるよりも先づ心を取換へさせて、大に之を勵まし、隱忍自重と自主獨往の氣魄とを以て業に従ふといふ風に指導する實行の人を、地方に分布することが寧ろ先決問題ではありませぬかと思ひます。金に飢ゑたるよりも其奥に心の飢ゑたる方が遙かに甚しき病根で

あります。「其の病氣を治せんと欲せば先づ其の心を治せよ」であります。即ち其の病根を治することが先決問題であると信じます。「藏の財よりも身の財優れたり、身の財よりも心の財優れたり」と云ふことがあります。今は心の財を與へて救ふべき緊急時期にあらずやと存じます。この心の非常時ともいふべき時に當り何故に爲政者は當座の便宜といふよりもこの大根本に向つて心から熱心に全力を擧げて心の改善に集注せないのでありますやかと疑はれます。物よりも人即ち心が先決問題であります。換言すれば外よりも内の改善が急であります。敬神崇祖、至誠實行、勤勉努力、儉素忍耐、剛健質實の類であります。匡救も自ら生きたとする活力あるものに向つてこそ効果あるものにして、心の死者には名薬なしと存じます。「汝を救ふものは汝自身なり」であります。「神の助けを仰ぐ勿れ、佛の助けを祈る勿れ」とは蓋し自己の力を信ぜよとの意味を言ふのであります。路傍の草は踏まれても獨りで立つて花を開きます。故に先づ自力を盡して後他力を



頼み、人事を盡して後天命を俟つべきであります。賢人は己れに求め愚人は人に求む。茲に根柢からして真に氣分の更始一新をなさざれば到底駄目であります。

世人多くは家相や地相に關心を持ちますけれども、肝腎なる心の家相即ち心相のことを忘れて居ります。私は家相以上に心相に注意し兩々相俟つて人生の完全なる幸福を得たいものと存じます。心は主人にして身體は家來であります。故に心だに健全ならば身體も亦随つて健全にして人生の赫々たる光明は前途に輝きつゝあります。此の頃宇垣朝鮮總督が心田の開発といふことを申されて居ります。物質よりも心田の開発が肝要なりとの意味に解せられます。即ち開発は先づ心よりあります。修養はカルチュアと譯しますがカルチュアとは耕すの義であります。私は大いに耕し大いに心田の豊作を期待致します。政治家の多くの人は曰く、今頃地方に向つて働けよ汗を出せよと叫んで見ても耳を傾くる人はありません。こんな念佛は時勢に應じませぬと。然らば斯の如く日を逐ふて「誠」に遠ざ

かるに任せて末は如何に成り行くかと問へば、どうも仕方がありませんと答ふるのみ。是で政治家の指導の資格がありませんか。徒らに時流を追ふて差當り己れの立場の無事ならんことに汲々たるが如きは大いに慎まねばなりません。須らく根本に向つて更正の大道に全力を盡すべきなりと存じます。若しも大政治家にして真に「誠」があるならば縱令今日非難せらるゝことありとも他日の爲に甘んじて隱忍自重し、國家將來の大事に向つて須らく勇往邁進すべきにあらずやと存じます。又何々組合とて種々の組合がありますが、之が真に「誠」の本義に則り立派なる実績を擧げて居りませうか。徒らに名の美を借りて其の實高き給料取が増加する養老場所なりとの誹なくんば幸と存じます。

或は曰はん「誠」と謂ふことは勿論善いことには相違ないが、現時に於ては、そんな悠々たる「誠」「誠」と申して金に縁の遠いことを言ふて居つた日には、我は先づ口が乾上るではないかと申さるゝ人もありませうが「誠」とか「堪忍」と



か申せば、直ちに消極的解釋を下し、去勢されたり又は愚直なる者かの如く批判されますけども、是は「誠」の力を知らざる人の言にして其の實決して然らず。皆さんが望まるゝその金儲けをするに就て「誠」が必要なりと唱ふるのであります。例へば「誠」なくして何んぞ金融の圓滑が行はれませうか。又「誠」なくして何んで商賣が永續し繁昌して行くでありませうか洵に簡單明瞭なる問題と考へます。「誠」の人が下積みの如くに見ゆるのは單に一時的のことに過ぎませぬ。「誠」は時の遅速こそあれ必ず貫徹成功するものであります。此の節積極的と申せば人の迷惑をも顧みず之を蹴飛ばして厚かましく自分丈け乗出せば如何にも活氣満々たる手腕家であるかの如く思ふ人が多いのであります。人の崇高なる所以を考ふれば之は全く穿き違ひの自己中心主義の積極であります。不義の榮華は夢の如し、道を外れて物を得たとて何んの満足がありませうか。何んの幸福がありませうか。笑止の至りと存じます。私は道に依つて儲けよと申すのであります。

「誠」とは前にも申せし如く「言を成す」と書いてあつて、言へば必ず實行成就するといふ偽なき真心のことにして、眞剣に一意専心に自分の仕事を働き、先づ自らを愛することなれば「誠」は世界人類生活の實地體行する規範であります。第一此の「誠」の實ありてこそ、信用も起り資本にも縁付き得らるゝ次第でありまして、之に反し其の「誠」の實がないとすれば己れ自らを放棄するものであつて、是では人も成らず言も成らず信用も起らず資本も決して近寄らざるものであります。されば「誠」は自分を起たしむる奮闘努力の源泉にして、資金に愛好せられ立身出世、商賣繁昌等開運の根幹といふべく「道は近きに在り、却つて之を遠きに求む」でありまして多くの人々は近き根本の道がありながら却つて其の實脚下より離れたる遠き〳〵道を求めて之が爲に皆悶々として彷徨して居るのではありませんか。功を急ぐものは功より遠ざけられ、自分が生きやう〳〵と焦ることとは却つて自分を殺す結果に陥るものであります。何事も常住不斷の間に在り平



常心是れ道であります。

「恒産なければ恒心なし」とか「衣食足つて禮節を知る」とか申すことは確かに一面の眞理でありますけれども、其の自家の孟子でさへも「生を捨つるも義を取れ」と申されて居ります。「且に道を聽き夕に死すとも可なり」とは至言であります。

要するに獨り金錢に限らず總て義務を盡す上に於ても、又働く上に於ても人間の凡ゆる行爲の上に於て盡すべきを盡すのみならず進んで借り方主義を轉じて貸方主義たらんことを冀ふものであつて、斯くして人の道も立ち生活安定も出來又世の中も明朗化すること、信じます。今日は何事も餘りにも平然として借越し生活に過ぐるの弊ありと存じます。思はざるも甚しきものであります。

### ○救済の極意としての誠

元來金で信用を作るよりは信用で金を作るべきであるのに、世人は之を顛倒して居るものと存じます。勿論金は生くる爲には最大必要物には相違ありませぬ。人の生活には衣食住を離る譯には參りませぬし又事業を興す上に於ても資金が必要である。世の所謂功利主義を指すのではありませぬが、人生れて誰か富貴榮達を欲せざるものあらんや。されば我人共に大に金を儲けるべきであります。殊に我々實業家に在つては一層其の必要を深く感ずるのであります。只斯かる必要なる金なるが故に私は正々堂々と「誠」なる大道の上に立たざれば永續が保たれないと考へ茲に唯心唯物の兩史觀よりして申す次第であります。而して金を多く積むこと必ずしも幸福ならず。義なき富は瓦礫の如し。金錢の善用は最上の常識であります。只自己慾に耽りて社會公共に奉仕する心なきもの果して幸を得るでありませんか。能く蓄へ能く散ずるこそ眞の本義と考へます。願はくは守錢奴となる勿れ濫費者となる勿れであります。庖丁も使ひ方に依りては菜を切り又指を



も切ります。財寶は積んで散ずれば福となり、積んで散ぜざれば禍となります。富は己れの爲にせば禍となり、人の爲にすれば福となるものであります。元來金は道具にして最終の目的にあらず尊ぶべきは人であります。又人あつての金であります。されば金に役せられ金の爲に生きて居るのではありませぬ。又黄金萬能でもない。若しも吾人を物質萬能の生活に求むるときは決して満足を得ず、限りある物質の破滅が結局人生の破滅となります。之は餘りにも尊き人生が嘆はしくも無意義に了ることゝ存じます。故に金々と物質的に成功せんと惱むよりは、重點を精神生活即ち心の富に置き心の活き方心の持ち方心の向ひ方に思ひを致せば、徒らに他人の富を盗み他人の権利を侵害し他人を妬み怨むことなく、貴賤を問はず萬人が萬人悉く必ず成功致すのであります。心の富を得れば足らずといふことなく不平不満もなし。然らば心の富は如何にして得らるべきか「未曾有因緣經」には七聖財とて七つの富を致すべき道が教へられてあります。一、信財（信

用）二、進財（勤勉）三、戒財（規律）四、慚財（反規）五、聞財（見聞）六、捨財（慈善）七、定慧財（智識）でありますが、私は其の一をも實行すれば既に心の富に入りたるものと思ひます。巧智を弄し徑路を行くものは進むこと早きも實は暗黒にして危険多し。之に反し大道を行くものは、進むこと遅きも實は明朗にして安全なり。盲人は常に心で道を歩くゆゑ躓きなしと申して居ります。是れ心が確固と存するからであります。身體には老少あるも、心には老少なく、又道理にも老少の別なく健全にして廣大無邊であります。

凡そ人は自制心を持つことが肝要であり之には宗教心の修養が必要と存じます。が兎に角推譲の心を持たねばなりません。二宮翁は「讓つて利あり奪つて損あり」又其の適例として「風呂の湯を向に遣れば手前に戻る、之と反對に手前に之を引寄すれば向に逃げ去るものなり」と言はれて居ります。先づ己れを犠牲として人を利するは畢竟己れを利する根基であります。而して日本では古來應報を求むる



の意義がありませぬ。二宮翁の教も亦然り、故に日本で云ふ恩の義は外國では通ぜず又これに相當する文字もありません。人間の本領としては飽くまで正しき眞の人間として生きたいものであります。「他を愛するものは他より敬せらる」犠牲なき處に和なく報ひなし。前にも申述べました如く人間は神のお造りになつたものなれば即ち神のものにして、神の御心に副ふことは當然のこと、存じます。凡そ何人も活きた「誠」あれば青天白日常に我に在り靈光體に充ち心氣自ら高潔明朗にして事に當りて何等遲疑逡巡するところなく恰も無人の野を行くが如く、勇氣凛々生氣潑刺たりと謂ふべきであります。天地一日も和氣なかるべからず。人心一日も喜神なかるべからず。「笑ふ門には福來たる」笑聲なき處昌盛なしと。されど内に「誠」なくして何んで本當に笑へませうか。他人を怨む勿れ父母を罵る勿れ妻子を責むる勿れ、人を映す鏡を轉じて先づ己が心を照らせよ。心月の妄雲霽れて己が本性に還る時、暗き世界を求むるも既に去つて明々澄々たり願くは心

に生きよであります。眞の愉快や眞の樂みは皆心の「誠」より生るゝものであります。故に眞の寶は心寶であり、眞の光は心光であり、眞の明は心明であります。

明治天皇御製に

淺綠すみわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

さしのぼる朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり

と御座りまして、恐らく一點の曇なき「誠」の心は、斯る廣く爽やかなる心境たるべしとの御眞意と拜察致します。「天空くして鳥の飛ぶに任せ、海濶くして魚の躍るに隨ふ」といふ明朗爽快且つ雄大なる氣宇襟度がありたいものであります。

前に申しました通り私の經驗上相手方の誠意の有無は金錢貸借の交渉に於て最



も能く窺知し得られます。試に「誠」ある人と「誠」のなき人とを較ぶれば其の相貌、其の人格、其の心境は天地の差異ありと直感致します。所謂心一つで鬼にも蛇にも將又神にも佛にも成り得るのであり、心次第では一輪の草花の中にも神佛の姿を見出すことが出来得るものと言はれて居ります。「一心定つて萬物服す」であります。徒に外物を追ふなかれ、宜しく丹田に力を入るべしであります。世人稍々もすれば「誠」は古しと申しますが私は「誠」は古くして新しきものと信じます。若しも「誠」を古臭しなど申す人があらば、恰も太陽の光線を古臭しと云ふに等しくして全く採るに足らざるの譬語であります。

明治天皇の御製に

人はただ誠の道を守らなん

高き賤しきしなはありとも

「誠」の有無如何と申しますに、遙かの政界の中央に於て口の先や單に書いた

ものを以て遠吠えし、幾ら地方の救済を論じ金を出せよと叫んで見ても、「誠」より發するにあらざれば恐らく實效はありません。若し左程に政治家が熱心に「誠」があるならば、自ら妻子を捨て、身を挺して農村に乗出し、自身先づ農村の人となつて眞劍に彼等を心から指導するといふ大決心があり、又それを實行する勇氣がありませうか。凡そ實行の伴はざる口藝當は、心から眞に人の爲を計る誠意あるにあらざりて看板に偽あり、多くは權勢利達の自己本位の政策的に出でたるものであると言はれて居ります。果して如何なものでありませうか。茲に所謂知行合一の必要があるのであります。孔子、釋迦、基督時代には皆知行合一、信行一致であつたものが後世に至り哲學的理論的となり終に知と行とが分離し今日の如く分裂文明の結晶となり、却つて主眼目的と相距ることとなつたのであります。纔か四十一歳にして歿せられ而も近江聖人として神社に祀られて居る中江藤樹先生は、身を以て龜鑑とし學と徳とは一なりとし、實行から實行へと進むる道



徳的實生活に即したる教であつたのであります。先生の學は明德を明らかにするに在り、夫れは人間第一主義と常に繰返して述べて居られます。されば先生の居所江州小川村にては、今以て村に一人の刑事被告人も出なければ又公租の滞納者一人もなしとのことであります。今日の學問は餘りにも理論より理論へと走り過ぎ實際に生きないといふ弊に陥つて居ります。即ち理論を知つて道を知らず、法科盛んにして文科衰へ、遂に國體明徴論をも惹起するに至りたるにあらずやと思はれます。茲に實行力ある「誠」を必要と致します。一人「誠」なれば周圍の人亦「誠」となるのであります。

抑々金は必要には相違ないが實は第二次的のものであり、寧ろ之を與へざる方が眞に更生せしむる本道かと存じます。況んや此の頃新聞紙上に傳へらるゝ高橋藏相のお話に依れば、救済金の三分の二は會議費や運動費に消えて仕舞ふと云ふに於てをやであります。果して然らば或は高等救済ブローカーが往來して居るの

ではありませぬか。彼の低利資金や或は補助金にしても、押賣りの誇りがありはしませぬか。眞に必要であり果して公平に且適切有效に使用せられて居るのでありませうか疑なきを得ません。或は実績の如何よりも先づ形式的施設の成績表を申達し自功に急なるの通癖に陥ることなきやとも推想せらるゝ節なきにあらず。是は我が國は外國と異り同一地位の職務にある者は勤続年數の如何を問はず、其の職務に忠實如何を論ぜず、待遇が向上せざるゆゑに勢ひ何等か外の形に現はるる成績を見せて現地位の早く變更することを求めて、出世向上を計らざるを得ざる制度組織の弊かと存ぜられます。私は兎に角何事も病源を究め救済の方法を眞劍に考へ其の効果の最終の実績に重點を置くことが肝要なりと考へます。或は頻々と交替し又交替せざれば待遇が上進せぬ今日の制度組織にては恰も身に電氣の通ずるものなく只机に依つて電氣が一時的作用をなす如く義理一片の提唱に過ぎずして、終始一貫せる「誠」を以て指導する根本精神の熱が乏しきも已むを得ざ



ることかと存じます。此の點は大いに心して考ふべきなりと且つ憂へ且つ嘆ずる次第であります。

○二宮尊徳翁の誠

二宮尊徳翁は曰く「我が道は至誠と實行とに在り」と又「凡そ世の中は智あるも學あるも、至誠と實行とにあらざれば、事は成らぬと知るべし」と、又更に「勤、儉、讓は世を歩むの大法なり」と常に一貫して説かれて居ります。眞理は極めて平凡ではありますすが之を實行に移せば益々高く光り輝くものであります。

翁は「誠」の大道は世の中に只一筋である。神といひ儒といひ佛といふ、皆是れ同じく大道に入るべき入口の名である。天台、眞言、法華、禪、皆同じ入口の小路である。何の教へ、何の宗旨といふも、清水に藍や紺を解かして染め之を藍宗、紺宗といふに過ぎない。故に入口が幾箇あつても到る處は必ず一の「誠」の

道である。例へば富士山に登るに吉田口あり須走口あるも登つて見れば絶頂は皆一つであるが如し。「誠」の道に到らず無益の枝道邪教に入るもの多し、慎まざるべからず。と言はれて居ります。

「誠」の道は學ばずして自ら知り、習はずして自ら覺えるものにして古歌に

水鳥のゆくもかへるも跡たえて

されども道は忘れざりけり

とあります。老子も亦道は自然であると説かれて居ります。されば道を説くの必要あるは是れ世の中に道の缺けたるを證明する有り難くない現象と申すべきであります。

翁の報徳訓に曰く

- 一、父母の根元は天地の命令にあり。
- 一、身體の根元は父母の生育にあり。



- 一、子孫の相續は夫婦の丹精にあり。
- 一、父母の富貴は先祖の勤功にあり。
- 一、吾が身の富貴は父母の積善にあり。
- 一、子孫の富貴は自己の勤勞にあり。
- 一、身命の長養は衣食住の三にあり。
- 一、衣食住の三は田畠山林にあり。
- 一、田畠山林は人民の勤耕にあり。
- 一、今年の衣食は今年の産業にあり。
- 一、來年の衣食は今年の艱難にあり。
- 一、年々歳々報徳を怠るべからず。

翁が小田原侯の分家宇津氏の采地下野國物井村が天明年間の飢饉にて戸口減少田畠荒廢せるを復興するに當りて其の建議書に曰く、

荒を闢き廢を興すは實に易からざるの事なり。此易からざるの事を擧げんに  
は、皇國開闢の大道に由らざるべからず。夫れ開闢の道に順ひて之を行はば  
失敗の患あることなし。從來の法の如きは若干の賜金あるが故に、人皆心を  
金に奪はれ、詐欺百出して遂に荒廢に至れり。故に始めより此金なくんば其  
弊甚ぜず。顧ふに開闢の時、金を海外に借りるの事なし。故に皇國は皇國の  
力を以て國を治むべし。故に志を天孫が豐葦原に下降し給ひし始に本けなば  
何ぞ失敗の患あらんや云々。

而して悉く田宅を鬻ぎ、家族を携へて物井村に移り、専心黽勉從事し、數年なら  
ずして功績大いに擧りたりとのことありますが、今日農村救済を叫ぶ方々には、  
他山の石と申しませうか、或は頂門の一針とでも申しませうか、賜金既に然り況  
んや借金に於てをやであります。救済は借金釀成の弊を誘導する結果とならざる  
かを憂ふるのであります。此の頃小學校教員俸給國庫補助が約八割にまで増加せ



らるゝに随ひ、却つて町村に於ける俸給不拂の高が増加するは抑も何を物語るものでありませうか。

二宮翁は「神代の初め、たつた一人で葦原の中に天降つたと思ひ一身の力でやり通せ」と自力勤勞行を目標として居られます。「鋤や鍬を貸して呉れよと決して頼むな、其の家で働けよ、さうすれば其の中に先方から鋤鍬を使つて下され、貸して上げませうと言つて来るものである」と申されて居りますが、金を貸して下されと言ふ前に、自ら眞面目に正直に働けば、どうぞ金を使つて下されと頼みに来るやうになることは必定であります。然るに今日は「先づ金を與へよ、先づ仕事を與へよ、さらば働かん」と言ふのでありまして、斯の如きは本末顛倒のこゝと存じます。「月給を増して下さい、されば大いに働ませう」と申した者に、実績の擧つた例がなく、使ふ人よりすれば月給を増して呉れといふやうな人は月給を増す價值もなく、又どうしてそんな氣持にもなれませうか。故にこんな

人間は發達の見込なく結局駄目であります。古人言ふ「業は勤むるに精し勤むれば必ず其の極致に達す」と。

二宮翁の人道主義は勤勞に即したるものにして

人道は一旦怠れば即ち廢す。されば人道は勤むるを以て尊しと爲し、自然に任ずるを尊ばず。夫れ人道の勤むべきは己れに克つの教なり。

とあります。「己れに克つものは人を制す」であります。

二宮翁は、勤勞主義者である點よりして孔子及釋迦に對し立場上共鳴し難き點を克明に申されて居ります。聊か過ぎたる言の如しと雖翁の勤勞實行に即する主張よりする批評を左に其の概要を述べれば

孔子の道は之を物に譬へて言ふと、振舞の献立をするだけで、まだ肝腎の振舞の正味に至つて居ない。

釋迦の道は振舞の正味が終り猫が皿を嘗めに來た頃、前の振舞の跡勘定をし



て居るが如し。

右の如く孔子も釋迦も共に振舞の前後のみを考へて肝腎の正味の處を投げ遣りにして居る。

孔子は只机に向つて儀式ばかりを説き、釋迦は念佛を唱へて未來を説くも、生活の道がない。人命をつなぐ米麥も故なくして天から降るものにあらず、人の勉強に依つて耕す汗の實である。

吾々生存を意義あらしむるには勤勞努力を忘るべからず、勤勞努力は人道の大本、人文發展の大切なる鍵である。この鍵なければ人生の寶庫に入る能はず。故に人道を勤むるを以て尊しとす。是れ天地の化育を助くる大道なり。と道破せられて居ります。尤も以上は勤勞の立場より見たるものにして心の問題より見れば何れの教も歸する處一體にして又道德も信念も一元であると存じます。

或る協會にては勤勞者精神作興に就き左の要目を強調致して居ります。

#### 強調要目

- 一、團體の本義に即してその精華を發揚するため維新の大道に本づき日本精神の體現に邁進すること。
- 二、我國內外の情勢を審らかにして時局の真相に關する認識を深め勤勞者としての責務を知り自己を反省して志操健全なる國民的信念の透徹を圖ること。
- 三、質實剛健の氣風を作興し克己忍苦、不屈不撓の生活を修練し各自の業務に淬勵すること。
- 四、中正なる思想を堅持し協戮同和能く醇厚の美俗を濟し産業人として報效の誠を竭すこと。

獨逸民族を結んで更生せんとするヒットラー政治は、條例に依り男子に六ヶ月



間の労働奉仕を強要し艱苦の修練と身體の強健とを目的として、貧富上下の別なく如何なる人と雖全部一齊に服従せしめ又軍隊式に養成して居ります。是は労働行事を通じて精神鍛錬と性格訓練とを爲して居るのであります。平素は勿論一朝事あるときは如何に之が役立つでありますか。而して皆悉く愉快に働き、殊に女子は強要せざるも労働奉仕の經歷なきもの、顔が日に焼けないものは嫁入口が乏しいと云ふので争ふて就業する趣であります。この身心共に健全なる母にして健全なる國民を生み、この健全なる小國民にして將來大々的に獨逸の立直しをなすものと信ずるのであります。獨逸は「個人は全體の爲に」「個人は全體の後に」との標語を造り祖國再建の爲に懸命の努力を拂つて居ります。國情も異なるが故に、必ずしも其の通りにせよとは申しませぬけれども、我國農村の子女の現状は果して如何な傾向を辿りつゝありませうか。此の頃獨逸で唱ふる如き「血と土」との精神即ち家庭國家心及農民的土着心に燃えて居るでありますか。田地を賣

つても娘を女學校に入れざれば嫁入口なしと云ふに至つては徒らに表面的の虚榮文化に迷へるに過ぎずして、却つて在來の醇朴なる美風を破壊することなきか、女子本來の徳性健在なるやを疑はざるを得ません。況んや都會の有閑マダムやフッパ―娘に於てをやであります。之れでは何處に眞劍なる更生を求むることが出来ませうか。又果して國を健全に維持し得る未來の健兒が生れ來得るでありますか、將來の壯丁の心身の健康に就ても疑なきを得ません。青年の男女須らく元氣たれ、須らく希望に燃えよであります。希望は人生最大の力であります。我が國も此の點に就いて根本的に大いに考ふる必要ありと存じます。獨逸の勃興史を觀ても佛蘭西のナポレオンに蹂躪せられ其の敵愾心として大いに教育を興し、或はハンブルグに商工業を盛んに起して世界を制壓せんとしたるが如き眞に獨逸魂の生けるものありと存じます。即ち勇氣と決心とが必要であります。

青年重ねて來らず、一日再び晨なり難し。



精出せば凍る間もなし水車。

翁は人間は美食があつても之を泥棒や禽獸の如く直接行動に依つて取るものにあらず、勤勞に依る取るべき道を以て取るべきであり、其の勤勞は「誠」と離るべからざるものと説かれて居ります。眞に其の通りと存じます。勤勞の作業と精神鍛錬と互に相待つて完成するものと存じます。

又翁は神儒佛の三教を打つて一丸となし「三味一粒丸」として之を自他に施すを以て「報徳」と言はれて居ります。山岡鐵舟翁も亦神儒佛の三道融和の道念を日本傳來の武士道と呼ばれて居ります。

さて二宮式と云へば、古い經濟のやうに思はれますかも知れませぬが、曾て新進の博士連が歐米の新學問と對比攻究せられし處に依れば少しの差異なしとの結論を得た趣であります。恰も大楠公の築城法が今日何等の缺點なき模範と稱せられて居ること、好一對の對照であると存じます。此の頃世界で唱ふるロータリー

の奉仕精神も全く二宮翁の推讓のことにして人種や國境を超越したる大なるものであり、現に今日説かるゝところの自力更生も即ち二宮式であります。且つ二宮翁は經濟と道德とは一致しなければならぬといふことを唱へて居られますが、深井日本銀行總裁の力説せらるゝ彼の有名なる經濟學者ラスキンの如きも最初に申しました通り同一の説でありまして、是は古今東西を問はず眞理は皆一なりであります。即ち經濟上に「誠」を以てし嘘を吐かぬと言ふ自信は、これぞ自力更生の基調にして、これが即ち貧乏退治であり負債の償還策であります。

今日の大阪朝日新聞にも載つて居りましたが、信州伊那郡三穗村に於ては、今より三年前に自力更生を實行すべく、先づ以て禁酒を行ひ協心戮力家業に勵精したところ、縣下隨一の租稅滯納村であつたものが、今日では既に一錢の滯納もないばかりか餘裕が出来て、こんな好調子なれば更に尙五箇年繼續しようではないかといふ議が起つて居ると云ふことであります。是等公私經濟の改善は林村長



及び同姓の林助役の熱心なる指導なり實行の「誠」が現れた結果であると考へます。即ち二宮式に依り心の行詰りを打開したるものであります。嘗て自力更生を唱へて居られた、時の總理大臣齋藤子爵は、此の頃この三穂村に「克勤克儉」と云ふ四字を書いて與へられたさうであります。此の四字なる蹇々匪躬の「誠」が即ち自力更生の極致であります。此の志なきものは成功を望む資格はありません。縦令今後米繭が高値となりましても矢張り根本は自力更生に在りと存じます。私は村民の襟章に「自力更生」の文字を附けたいものと思ふて居る位であります。私は言ふを憚りますけれども實際從來の如く租税滞納、脱税、家賃不拂、債務不履行等の不義理者兼偽名譽職といふ「誠」なき利慾本位の代議士や府會議員や市會議員や村會議員や商工會議所議員や又「誠」なき種々の役員が存在し巾を張つて居る限り、勤儉力行は勿論何事も到底眞の回復發展の實現は望まれせぬことゝ存じます。過日も補助金を横領したる府會議員等十餘名發覺したりと新

聞に出て居りましたが皆さんは何んと感ぜられるでありませうか。「誠」を説くもの果して世外の道學者でありませうか。こんなことでは全國民の緊張向上は如何でありませうか。思ひ半ばに過ぎんやであります。

二宮尊徳翁は天道と人道とを説いて曰く

往く者は來り、來る者は往く、是れ即ち天道なり、是れ故に勤めざるも止まず。

右足を進め、左足を進む、是は則ち天道なり、是れ故に勤めざるも止まず。登る者は下り、下る者は登る、是は則ち天道なり、是を以て勤めざるも止まず。

(中略)

原野を田畑と爲すは人之道なり、天之道に非らざるなり、田畑を草野と成すは天之道なり、人之道に非らざるなり。



田畑を米麥と爲すは人之道なり、天之道に非らざるなり、草木を田畑に生ずるは天之道なり、人之道に非らざるなり。

勤むること無くして自然に成る者は天之道なり、是れ故に爲す無けれどもも終に成る。

勤むること有り物を爲して成る者は人之道なり、是れ故に爲す有れども而も終に亡ぶ。

(中略)

寒の寒時を爲くる者は天之道なり。寒を暖となし身を安んずる者は人之道なり。

水車の廻るは半ば天道にして半ば人道なり。併し所謂寸善尺魔、水は低きに流れ候自然を堰き留め用水に致し米穀作出し候は人道に御座候云々

天津日の恵み積み置く無盡藏鍬で掘り出せ鎌で刈り取れ。

即ち二宮式は、一見するに人は天道に逆ふべくとも見えませすけれども其の目的は決して然らず。人道の勤めると云ふ努力に依て進んで天道を利用開發して厚生を圖り、以て兩者相俟つて自然の天意を全からしむべしといふ本旨なりと存じます。天道の中に人道あり、天を知つて人道を行ふ。之を天に従ふと申すのであります。天は眞なり、全なり、無盡藏であります。天の道を「誠」にするとは實にすることにて勤めて實にすることなり。例へば米穀は何處までも米にして質を變ぜず天道なり。然れども穀倉に置けば形其丈けなり。之を田を耕し米を蒔きて勤めて世話をなせば幾倍の米が出来る。之は人道を盡して實にする。即ち「誠」にするのであります。二宮翁は一面には天災地變の不時に備ふる爲に平常に於て儉素貯蓄せよ、無事の時に決して油斷すべからずと堅固に教へられて居ります。時の如何を問はず事の大小を論ぜず天は幾千萬人を活かすが爲に常に油斷に向つて警鐘を鳴らして居るものであります。我々は決して聾者であつてはなりませぬ。「天



は寒暑を以て徳と爲す」世の中は少しも油断あるべからず。窮通共に功を成すのであります。英國にては家計上に必ず收支の豫算を立て且つ収入額より先づ第一番に一割を貯蓄に充つるを以て一般の慣習と致して居る堅固なる生活振りであります。

翁の駿州御厨郷中への教訓の一節に

家を保つも身を治むるも何も不思議はない「誠」の一つを以て之を貫くのじや。「誠」は天の道にして之を「誠」にするは人の道といふものじや。粟を蒔けば粟が生へ、麥を蒔けば麥が生え、米を蒔けば米が生へ皆其の通りに生命を正しふする是を天の道といふ。

(中略)

今日より天の言ひ付け通りに守りさへすれば返すくもいふ通り粟を蒔けば粟が實り、米を蒔けば米が出来、善き種を蒔けば幸ひが實る、悪しき種を蒔

けば害が實るは天の「誠」の道で之を「誠」にするは人の道なりとは報徳(指導原理)の事なり云々。「誠」にすることはこれを實にすることでありませう。

尊徳翁座右銘に曰く

- 一、人は常に善を施すことを勉むべし。彼よりは亦善を以て酬ゆるを望むべからず。彼は彼、我は我なり、我は只々我が道を行ふべし、彼が善不善は我が心にあづかるべからず。
- 一、朋友親戚の間は、只々「誠」を以て交るべし。
- 一、人、我に過ちあらば、其の心を廣くして之を許すべし、我が身に過ちあらば其の心を小にして責むべし。
- 一、君子は仁を保ち身に善を行ひて其の善を人に知らしめざるを欲するは即ち陰徳なり。
- 一、大丈夫爲さざれば則ち止む、爲さば則ち奮發銳進して以て大成を期すべし。



きのみ。

一、人は皆其の獨りなる時は誠實なるものなり、然れども他人の前に顯はるるや否や、直ちに偽善虚飾の人となるものなり。

一、物の本末を辨ふるより大なる智慧はなきものなり、人にして其知識益々進めば、身は彌々謙遜に赴くべし。

文化を誇る現代人よ、大いに自己を戒飭し大いに自覺反省せずして可ならんやであります。凡そ世の中の惡しき出來事は自分を反省自戒せず自分を見直さざることに歸因すること多きに居ると存じます。人を咎むる前に先づ己れを責むべし。所謂「春風以て人に接し、秋霜以て自ら肅む」であります。己れを治むるは人を治むる所以にして、人を安んずるは己れを安んずる所以であります。

明治天皇の御製に

世の中をおもふたびにも思ふかな

わがあやまちのありやいかにと

### ○無我の誠

兎角政治家は、大言壯語を吐くに似ず其の實際は、國策大本よりは其の場其の場の一時的應急施設と申しますか、膏藥張と申しますか、兎角彌縫の小策に急に於て前後と一貫したる聯絡なく、他日之が無駄或は有害となること多く、殊に都鄙大小を通じてほんの表通りの其の時の自分の立場の責任上都合の好い眼先の策を講じて、後々の始末の必然的本格の責任を考へませぬ。元來斯うすれば人がどう思つて呉れるとか自分の心を分析したり或は人に見せつけたいやうな飾りの「誠」には決して生涯を賭しての眞の魂が入らぬものであります。徒らに言葉美にして眞の力も權威もなき所以であります。兎角世の中には自分を偉いものと見せんとして名利を求め踞傲に奔るものが多いようであります。恐らく各方面とも其處



に共通的に大なる缺點が存することは蔽ふべからざる事實かと存じます。求めざる名利こそ人徳の然らしむるものであります。古人は「睹られざる處、聞えざる處に盡すを眞の「誠」なり」と言ひ「忠臣と孝子とは昭々の爲に節を信せず、冥々の爲に行を墮さず」と言つて居ります。これこそ永遠不滅の眞の「誠」であります。即ち無我の心境であります。この心境を以てするならば一燈園の便所の掃除と雖も或意味に於て天下國家の掃除なりと或る哲學者が申されたことがあります。今の大丈夫とは如何なる人でありませうか。

する墨のゆがむ心は持たねども

硯の思はぬこともはづかし

道を外れて進み天定つて始めて覺るのでは「日暮れて道遠し」の憾があります。

一面地方の自治體は如何かと申しますに、是亦政黨派の流弊甚しく、自治體たる獨立性及發展性たる眞の本質は蹂躪滅却されて居り、官僚政治時代よりも一

層弊害多き有様であります。又自治體の議員は名譽職であることを忘れて職業化し、素質の漸次低下することも是亦争へぬところにして事實は歴々證明して居ります。畢竟皆是私益を先にして公益を後にし、無我の「誠」を缺いて居るが爲であります。私は國家興隆の基は國民の素質品位を優良ならしむるに在りと信じます。こゝに於て普選の害も大いに考ふべきなりと存じます。

時の官吏は銀行に對し金を出せ〜と呼び掛けても、先々の回収のことに就ては一向にお考へ下さらぬ。況して貸出融通することが必ずしも取引先將來の爲ならず、銀行は決して出し過ぎりをなすにあらず、金を出すことは容易い仕事ではありませんが、其の回収の跡始末を慮るが故に兎角躊躇するのであります。之は前例に懲り〜として居るからであります。獨り中小商工業者に限らず、會社にても同様であります。重役は辭職して逃げたらば宜ろしからんも、跡に残つて長く面倒の泥中に陥り喧嘩の衝に當るものは何人でありませうか。單に面倒の勞のみな



らず、元來銀行の金は他人よりの預金であります。然るに金の回収が困難になつて来た時分には、貸出を勧めた役人は既に他に轉任して仕舞つて吾不關焉を極め込み、曾て自分が在任中にやつたものであるからとして何處迄も其の責任を守り、最終まで世話をする義務ありと言つて出掛けて來られた例しは未だ曾て聞きません。斯の如くにして果して金融が圓滿になり、社會人心が善化されませうか。又果して事業發達の指導者となり、責任感の先驅者となりませうか。さはあれ思へば成る程我が國にては一年や一年半にして頻々と更迭する地方官として、さも無理からぬ心裡状態であるかと察せられます。是は果して制度の罪か將又誰の罪でありませうか。

當初借入金に就て大官名士が喙を容れるのみならず、時に或は地方長官や市長は土地の人に頼まれ、役目柄銀行に向つて既成の貸金を減免して遣れと交渉することあるも、是は恰も今後一般の融通を阻害する結果となり、又預金不拂を公認

することにも當りますから、牧民の職に在る者は宜しく本末を誤らず、寧ろ債務者に對し正直に義務の履行を説得し人としての歩むべき道を指導すべき筋合であると存じます。然らざれば平生學校の生徒や部下に於ける訓諭と撞着するにあらずやと存じます。故に一部のものゝ一時的人氣取りではなく、將來其の土地一般の社會的精神の暢達と永遠の繁榮の爲に、是非とも眞に誠意と親切とを以て管下の人々を信義ある良俗美風に指導せられんことを切望致す次第であります。兎角高壓的に貸出を強いたるものは返済に當つても亦減免を高壓的に強ゆる場合多し、斯の如くして金融の圓滿や預金の安心を得らるゝ筈はありません、思はざるべからずと存じます。山梨縣の或る村にては泥棒なしとて夜戸締をせない處があります、夫れは借金を返さない時は公衆の前で嗤ひ辱しめる習慣が今に猶現存して居るからであると言つて居ります。世に恥を知るものは實に勇者であります。



彼の大銀行ばかりに偏せず、從來の如く中小銀行が金融の便利上必要であるとか、地方に於ては地元銀行が便利であるとか云ふことは私も大いに同感であります。併し其の便利と云ふ意味は之を悪用し、之を喰ひ倒すに便利であると云ふ意味であるかと問はゞ、不幸にして否と確答せらるゝ勇氣のある方が果して幾人ありませうか。こんな實狀なればこそ希望は兩立せず已むを得ず中小銀行は合同して大きく堅實にするとか、或は大銀行が残るとか云ふ結果になるのであります。元來得意先が皆小銀行や地元銀行を支援して互に便利を交換してこそ、共に健全に存在發達して行けるのであります。唯自分一人のみの便利を圖ることを目標として勝手なことのみに唱ふるものは公論にあらずして大いに間違つた私論即ち利己論であり、事實又從來それが到る處大いに害となり、遂にその多くのものが滅亡を見るに至つた實例であります。銀行は何故貸出を澁るのかと詰る人は多きも一體正直に返へす金か將又返さぬ金か先づ以て明答せよと申せば即座に答ふる

人は少なかるべしと存じます。金を借る人と金を預ける人とは各心理状態の異なることを豫め承知あらんことを望みます。銀行の破滅には銀行當事者の罪も少からざることは無論であります。債務者の不誠實に原因すること少なからずであります。兎に角信用商賣には心の「誠」が根本であつて、金融機關や制度の問題は第二次的のものと存じます。されば第一に其の經營の根本精神に向つて宜しく指導すべきであると存じます。

今日小銀行の代りともいふべき産業組合の金融營業振りは私は詳しいことは存じませんが、小銀行失敗の轍に鑑み自他の爲に堅實に經營發展せんことを序ながら冀ふものであります。凡そ銀行と云はず會社と云はず商店と云はず、其の興廢は一に經營者其の人に在りとは私の持論であります。今日外國の銀行を見ても、制度事務に就ては殆んど範を採るほどのものなく採るべきものは一般取引先の堅固誠實にして、銀行の堅實なる方針とびつたり一致し理解ある互扶互助の傳統的



徳義者組織の美點にして、父祖の代より引繼げる互信の取引多く、我國の或部類の如く浮薄不實なるものにあらざることが羨しく採つて以て範となすべき所に於て、亦社會一般が互に斯かる道德境地にまで進むことが結局自己の利益なりと理解ありたいものと存じます。其根源を究めずして單に銀行は社會の爲に犠牲を拂へと叫ぶことは却つて自己を不利に陥らしむるものと存じます。而して彼是を顧みれば我國の缺點は共に俱に無我の大乗的「誠」が缺けて居ることに原由せることは争へない事實でありまして畢竟人の問題に歸着致します。

併し「誠」なるものは心に屬し、表面の法律命令で強制する譯には行かないもので是は教育の力に由つて涵ふの外はありませぬ。其の教育と申しても、兎角學校教育とのみ思ひますけれども、單に學校だけでは到底及ぶところではなく、家庭教育、社會教育が最も必要であると存じます。茲に於てか此の清交社の俱樂部なり其の他の俱樂部或は協會の會員の如き、同人の先輩であり世の先覺者たる各

位は、宜しく此の意味に於て凡ゆる機會を通じて世人を覺醒し、善導して下さる義務ありと存じます。吉凶禍福は皆因果關係であり、同時に又相互關係でありますから、こゝに銘々が反省し自覺し互に相助け小我を捨て、大我に就くの必要ありと存じます。日本人は兎角人の不幸には同情するも人の善には左程好意を寄せず、而已ならず「悪い籤は人に廻れ、善い籤は自分の處に來れ」と勝手なことを希ふて居ります。人の爲すことを見てけなしたり嘲笑したり、又少しく頭角を顯はさんとする之を助けんとはせず、却つて之を引落さんとするの惡癖がありますが、人間として「己れ立たんと欲して先づ人を立て己れ達せんと欲して先づ人を達す」といふ謙讓の心持が切に望ましく「世に處するには一步を讓るを高しと爲す、歩を退くは即ち歩を進むる張本なり」であつて之が人情であり「誠」であると存じます。されば求めずして善き報ひ來る所謂「徳孤ならず必ず隣有り」であります。先哲も「義を先にし利を後にすれば榮へざることなし」と申して居りま



す。凡そ反省し自覺すると云ふことは佛の所謂「無我にして徳に進む」の謂であつて、この「誠」は即ち自力更生の眞の基調であり、之が社會を明朗ならしむる始であります。人若し自己中心生活を爲さんとせば、排他となり猜疑を生じ不平も出で憎惡の念も生じ希望に絶え前途も塞るものであります。昔、孟子は「大を養ふ」と言はれて居りますが其の大こそ今日に於て尙一層其の必要を痛感致すところであります。

### ○ 選舉肅正に對する誠

此の頃は日本精神に還れとか、大和魂に戻れとか申しまして、一般世人が餘程浮薄の域より脱して眞面目に移つて來たことは、甚だ結構であり大いに慶とするところであります。日々のラヂオの聖典講義や、朝の修養講座又は教育講座の如きも、知らず識らず大衆を感化指導する上に大なる効果ありと存じますが、私は

更に數歩進めて政府大官なり、政黨の首領や幹部其の他の重なる政治家なりが、單に其の職に立つた時のお役目柄としての形式的抽象的の訓令訓示をしたり、或は講演をせらるゝだけではなく、在朝在野を問はず大いに勇氣を鼓し齋戒沐浴先以て明治神宮に參拜して畢生の「誠」を心から誓ひたる後ラヂオに向つて、自分は從來は勿論今日以後一切嘘を吐きませぬ、只今神宮に心の底から御誓ひを立てたに依て爾今諸君と共に嘘を吐かず、眞劍に「誠」を眞實に仕事の上に勇ましく現はしてやつて行かうと云ふ決心を、心からの強き氣魄と信念とを以て大聲疾呼力を籠めて國民全般に誓つて下さるならば、茲に彼の「選舉肅正」とか「清き一票」とか「赤心一票」とか「忠義の心を選舉に移せ」とか云ふ俄か仕込の鳴物入りで騒ぎ立てるの必要もなくなり、政黨の信用回復及一般政界の淨化廓清は、當然實現し得るものと確信して疑ひません。果して眞に冒すべからざる威信を以て至誠なり無我なり信仰なりの底力を以て、必ず國民に感化感動を與へ得ると云ふ



強き信念の下に是等の誓約が國民に向つて高く眞劍に叫ばるゝことでありませうか。假りに昨日までの泥棒が今日聲を潤らして泥棒の非を説いても、何んの威力もありません。又大臣になると直ちに伊勢參宮を爲し、洵に結構なことゝは存じますけれどもさて歸京後惡事に觸れて疑獄の人となるやうでは、何んの爲の參宮であつたか何を以て國民に範を示さんとするのかさつぱり諒解が出来ませぬ。どうか辭職後各大臣方は、必ず參宮して御禮なり御詫なりをするやうにありたきものと存じます。是れ當然の結びなりと存じます。大阪は現金主義なりと笑はれますけれども東京の大臣方こそ餘りに現金過ぐるにあらずやと存じます。私は平素の「誠」の實現即ち良心に背かぬ言動こそ眞に肝要事なりと存じます。所謂「平生業成」であります。況んや政治家若くは政黨は年が年中選舉運動でない日はなく、又情實因縁も平生に醞釀せらるゝに於てをやであります。まして、彌々以て平生の「誠」の永續的教化訓練を必要とする所以であります。

「誠」の話の引例として少しく選舉のことに涉りますが、抑々過去數十年に涉り、黄金や利權やサーベルで斯界を腐敗墮落せしめたるものは誰の罪でありませうか。國民の無自覺にのみ歸して相濟みませうか。宜しく神に向つて問ひ良心に對して聞くべきであります。抑々第一回選舉の時は選舉肅正の必要毫も無く、明治二十五年第二回選舉の際、政府の大干渉に始まり次に情意投合となり買収となり、終には普通選舉に至りて腐敗益々甚しく全く投票賣買の商取引化したのであります。従來とても表面は毎時嚴正公平を唱へざるなきも果して事實萬民が公平を認めたでありませうか、將又直接間接に干渉の煩に堪えずと感じたでありませうか。尤も今日叫ばるゝ選舉肅正は洵に時を得たる快舉であり、我々は心から大いに之が達成に協力すべきは勿論であります。併し側面より見るに、第一に政黨にして氣力なく現在世間より注視の的となつて居る内部黨員の廓清新さへも出来ざるものが、何んぞ天下國家の重任に當り世を清め國民を正しく明朝に導く



ことが出來ませうか。又看板の政策も何等信を措くに足らずとの定評ある現況では、名は兎に角現實上果して一朝にして選舉肅正の收穫が豫期の如く得られるで  
ありませうか。夫れは届出たる立補候者の關係もありますが、到底一、二回の選舉  
にては容易に肅正の効果が擧らぬかと存じます。こゝに眞劍を必要と致します。

今日の制度なり法の運用振りでは複雑にして而も反動期とは申せ、取締り嚴に  
過ぎ甚しきは常識を逸したる點なきにあらず。爲に恐怖と厭氣とを生じ如何に棄  
權は罪惡なりと叫んでも一面棄權も亦止むを得ざるにあらざるかと存ぜられま  
す。況んや政治が何黨の手に移るとも元來政策本位の争ひよりも感情本位の争ひ  
にして、一般國民よりして其の政策を見れば彼此何等甲乙の別なしとの感を懷き  
精神的に興味を減殺せらるゝに於てをやであります。又況んや從來普選に依る投  
票は其の實は買収に基く金儲けに出でたるものにして、今回の如く眞正の投票と  
なれば金儲けもなく而も政策及人格に就き未だ鑑別理解の方法なく、又方法あり

てもその能力なく乾燥無味を感じるもの多きに於てをやであります。茲に於て私  
は一般普通教育の向上を必要と存じます。何れにしても差當り選舉法の根本改正  
を必要とするのではありませぬか。又其の取扱に就ても大いに常識的運用を翹望  
致す次第であります。固より肅正は主にあらず選舉が主でありますから信任すべ  
き人格高潔の材を選ばなければなりません。現在では小選舉區なるが爲に廣く理  
想の人物を得難く、又候補者届出制度の爲に職業的政治家が多數を占め眞に天下  
國家を念とする國士が出ない所以もこの點にあるかと考へられます。

元來選舉は主であり取締りは從にして末であり「誠」は其の根元であると存じ  
ます。何んとなれば選舉肅正は畢竟政治の倫理化であるからであります。故に刑  
罰嚴なれば棄權者の増加も當然であり、又恐怖萎縮して居るものも少なからずで  
ありませう。是は角を矯めて牛を殺すの類にあらざるか。茲に再検討の必要あり  
と存じます。私は根本問題として取締がなくとも皆一同が自由に安心して喜んで



投票に行くやうになつてこそ眞に肅正選舉であり明朗選舉であると存じます。其の他種々の取締法なるものは勿論必要のものには相違ありませぬが根本の解決とはなりませぬ。眞の根本解決には何事も「誠」より發する透徹明朗なるものが基礎でなければならぬと信じます。孔子は「之を齊ふるに刑を以てすれば民免れて恥なし」と言はれて居り「法愈嚴にして大奸出づ」といふこともあります。果して肅正は理想通りに行はれ新しき尊敬すべき誠忠有爲の人材が輩出するならば洵に幸福此の上もなきことと存じます。併し既に肅正委員中にも其の資格に就て彼是非難されて居る人もあるやうでありますが事實果して如何でありませうか。又彼の肅正は一種の干渉であり、又一方運動費缺乏の故を以て眼を閉ぢて肅正に賛同したるものなりとの悪口は、固より耳を藉すの限りではありませぬが、併し眞底何處まで信じ、又何時まで引續き信を措いてよいかは遺憾ながら疑なきを得ませぬ。私は肅正が一種の保護にもなるのかと解せられます。既成政黨の非難は天

下の輿論たるにも拘はらず、新規に政黨に關係なき名望ある人を擁立選舉するとはなか／＼困難と思はれます。其の結果既成政黨員の候補者は恰も保障せられたると同じく安心し且つ費用少くして當選する結果となりはしませんか。若し斯の如くであれば萬人が希望する議員の質の改良並に政治の淨化廓清は果して遂げ得られるでありませうか疑ひなきを得ませぬ。固より選舉制度の改正も必要でありませうが之は議會の協賛に待たねばならず、議員に都合の悪しき改正が易々と行はるべくもあらずと察せられます。兎に角立法の根本精神を一貫して其の運用を誤らざるよう大いに法を活かし萬民の希望に副はんことを冀ふものであります。茲に始めて肅正も意義ありと存じます。

神は目に見えぬ處にあるのが神であります。必ずしも宮の中のみにありますと限つた譯にあらずして、神は元來宇宙を家とし給ふ。只國民的精神の籠つた中心が神社にして、寧ろ神は常に「道」の中に在ますと申すべきであります。今回の



選舉に神を祭ることが大いに流行しますが、恐らく神社に參詣したり又は投票所に神様をお祀りしても、矢張其の内より違反者が出て、神様より笑はれる者がありはしませぬかと想像されます。何となれば至誠即ち神でありますから眞の神は型丈けの急造の御祭を無條件にて容易く御受入にならぬからであります。神は唯不斷の「誠」を受け給ふ。故に神様を拜むときは自分が眞に神様に成り切つた心持にならなければなりません。これが平素修養の結果でないとい出來ませぬ。

凡そ何事も俄造りでは到底物になりませぬ。彼のチエンバンが、旅行中バーミンガムよりして推舉當選したるとき、平然として“*Well-done Birmingham*”と言ひ放ちたる其の意氣は有名なるものとして傳はつて居ります。是は全く平素の修養如何に依ることゝ存じます。尤も我國にても妄りに腰を屈せず毅然たる意氣を示すものもありましたが、それは洵に寥々たるものであります。今回選舉の結果、何れが大多數を以て當選しましても、果して其の政黨の政策に賛同したるの

であるか、又其の人格を信任したるものであるかはそこに一票の價値に差違があります。清き一票は同時に國民の眞の總意を議場に反映せしむるものでなければなりません。若しも金も要る名も要る命も要ると云ふ念力なき人々が多いとすれば、國士として之に國家の大事を託して果して何程の効果が實現するでありませうかと疑はざるを得ません。茲に於て選舉の標準は全然私心を去り大局より見て比較的國家に忠誠を盡す資格あるものと認むる人物を選舉すべきであると考えます。斯くして漸次人物本位、素質本位と進み適者生存の鐵則に依り更生するの外なしと考へます。一體今日の代議士は自負心が低いのではありませぬか。代議士となれば直ぐに大臣となることを夢みますけれども、實質上の或る意味よりすれば大臣たるよりも代議士たる方が尊きにあらざるか。大臣となれば直ちに墓參に名を借りて意氣揚々と錦を衣て郷里に歸るを誇りとする心情を察するに稚氣満々たるの觀がありませんか。夫れよりも多年懷抱せる政策を行ひ其の事績を擧げ名



を遂げ野に下り、然る後報告謝恩の爲め展墓するに如かずと考へます。こんな有様では非常時國家の大事を如何せんやとの感を起すも亦止むを得ません。一時の榮冠に酔ふよりは代議士として其の與へられたる權能を尊重し本領を發揮し常に絶えず國事に盡瘁することが國士の面目であり本分であり榮譽であると存じます。此の高き清き大なる自負心を以て堂々と眞の代議士たる競争を願ひたいものであります。然らざれば封建時代の遺物を仰ぐやうな大臣病に罹つて居つて何んで權威ある眞の政黨が期待し得られませうか。

今日の中堅人物と呼べるゝものも失禮ながら詰り「誠」の信念が足らず心が浮いて足が地に着いて居ないのではありませんか。夫れ故に榮達を急ぎ又地位の壽命の短さを豫知して心茲に在らざるものゝ如く焦ぐやうに見られます。是れ甚だ遺憾とするところであります。國士としては敢然として一死報國の「誠」を根基とし熱あり其の力は一世を壓する千鈞の重みあらんことを切に望んで止まない處

であります。

今日行はるゝ所の普通選舉に對し、時機尙早なりしとの意見がありますが、最早實施されたる今日に於ては今更廢止する譯にも行きませぬから、此の形骸となつたデモクラシーの普通選舉をして、理想通り花あり實ある効果あるものに引直すことに向つて、最初の主唱者たるインテリ階級の方々が大いに勇奮努力せられんことを希望致します。彼の往年理想に富み指導の精神滿々たりし白薔薇の勇士今何處にありや、又普選何年祝を擧ぐるの實と勇氣ありやと問ひたいのであります。流石は政界の老名士島田三郎氏は「普選法が成立しても、心に信仰がなければ駄目に終る」と喝破せられました不幸にして之が適中して居るではありませんか。今や日本人を通じて缺けて居るものは信仰心の乏しきことであります。而して議員候補者の素質なり選舉人の程度を認識せず、只一般の時の聲に釣られて實なき理想に走りたるものが早計なりしと存じます。是も畢竟「誠」より發せ



ざる政策に出でたるものであると存じます。

抑々憲政の向上は議會の向上に在り議會の向上は議員の素質の向上に在り議員の向上は國民の向上に在り是には教育の水準を向上せしむるの必要あるは勿論であります。元來普選なるものゝ効果は如何でありませうか。教育の普及徹底せざる現狀に於て餘りにも大衆的理想に走り過ぎ太郎兵衛も次郎兵衛も勞せず勉めず無一文にして坐りながらに選舉權を得ることは詰り粗製無價值無意義の嫌なきか。寧ろ堅實に漸進するに如かずと存じます。「恒産なきものは恒心なし」と況んや國家の問題を議するに於てをや。又況んや家族制度は古來我が國性なるに於てをやと考へられます。今日の急務は立憲政治の擁護發達上よりして選舉人及被選舉人の一般の素質品格の向上が最も緊要であることは輿論であります。斯くて國民一般の參政が意義あることとなり、而して政府はこの眞摯なる代表に現れたる國民の總意をば明察し、社會正義に立脚して國家全體の福利の爲に之に對應する國

策を作り而して之を強く實行してこゝに憲政の美を濟すのであります。私はこの意義に於て之を指して國民が信賴する強力内閣と稱するものと存じます。是れ憲政治下に於て當然の現はれであるべきことと存じます。徒らに大衆の一時的の聲に踊つたり又は獨善主義を以て強引横車式を揮つては決して強力内閣とは云へませぬ。自己陶醉は政府でも政黨でも禁物であります。品格は自制修養に依つて向上し自制的中心は意志であります。然るに従來金で取引したる選舉は偽造であり眞の力ではありません。意志堅固にして「誠」を以てなしたるものは品位高く永久に其の眞價を失ひませぬ。故に私は選舉人も被選舉人も只「誠」に歸れよと叫び、夫れには政治なり教育なり總てを通じて「誠」を施し上下舉つて心身を健全明朗ならしむるの外なしと信ずるものであります。「政治は最上の道德なり」であつて只力のみでは永續しませぬ。同じく力を揮ふにしても純正なる信念を以て大いに揮ふべく決して無理を押切るが如き穿き違ひの誤つたる力を揮ふべからず



であります。彼の「政治は力なり」との語は或は壯年者には一時受入れられまじやうが却つて之が他日備を爲すものではないかと案思られます。結局は「誠」なくして政治の倫理化が出来ませうか。又倫理化なくして何んの政治がありませうか。温情なき殺伐の世や権力の世は國民を基礎とせざる惡政にして、世は險しき思を爲しつゝ暮らし國民生活は安定しませぬ。何を以て明朗駘蕩なる天日を仰ぎ得んやであります。私は國家國民の康寧安定こそ政治の要諦であると信じます。

又私は茲に一つの觀點を異にして、選舉肅正の目的の達成を希望する事を附け加へて申上げて置きたいと存じます。夫れは他にあらず今回教育家を選舉肅正に引出ださしめたことでもあります。從來教育家は政治關係から埒外に居つたものが、今回關心を持つに至つたことは進歩であり理想としては異議はありませんが、今後健全なる常識を堅持するの必要なると同時に、若しも選舉肅正の意氣及方法が永續的に實行せられずして一時的騒ぎに終り之が崩壊する様なことがあるとすれ

ば、教育家の神聖なる「誠」が破壊せられて政争の渦中に投じ、其の教育界全般に及ぼす惡影響の甚大なるべきを恐れ且つ憂慮するものであります。幸に之が杞憂に終れば洵に喜ぶべきことでもあります。私は此の點よりしても選舉肅正は是非とも永久に引續き真正に其の効果の擧らんことを切に望んで止まざる次第であります。

### ○ 議會政治の誠

彼のデモクラシーの理想たる議會政治は、却つて無責任政治となり、煽動政治となり、附和雷同政治となりて政治道德が破壊せらるゝのも畢竟「誠」を缺くからであります。政黨にして「誠」がなければ、自滅の外はありません。苟くも立憲政體たる以上は、議會を無視し政黨を否認する者はありませぬけれども、如何せん既成政黨の言動が國家本位の政黨ではなく、政黨本位の朋黨であるが如く國



家問題よりも黨利黨略を事とし實行は伴はざる空論を唱へ議會に於ても熱なく「誠」なく繼續性なく、一片の形式的お土産的質問や攻撃に過ぎず、答ふるものも其の場限りの遁辭たらずんばならず、斯の如くして國民より不信を買ふたが故に遂に政黨解消論さへも唱へらるゝに至るのであります。専制政治獨裁主義の如きは高壓主義にして世の批判なきが爲に反省なし、政黨政治には言論の自由ありて世の批判あるが故に能く國情を理解し反省もあり改悛もあり茲に發達ありと云ひ其の言や洵に善し如何にも其の通りであります、さて實際の狀況は果して如何でありませうか。決して是々非々の坦懷にあらずして自家陶醉に耽り世の批判を顧みず改悛をなさず自ら節操を破り情弊に陥つたではありませぬか。多數を恃み勢力の存する處必ず弊害伴ふ。節制を忽にせば驕る者久しからず。禍は自ら招くに至るものであります。故に今日の政黨は先づ第一に信用の回復が威信を保つ上に於て何よりも急務であると存じます。然らば如何にして信用を回復すべき

か、曰く、黨利黨略を去り國家の大局に立脚して國民の總意を代表し「誠」を以てし、言へば必ず成すのであります。空を説き嘘を吐かざるのみならず嘘なき範を示すべきであります。若しも實行しないような事なれば一切口にせざるに如かずと存じます。近くは獨逸のヒットラーの例を見ても明らかであります。彼は其の言ふところ悉く實行して居るのではありませぬか。是れ彼が匹夫より起りて大統領にまで登り信を得たる所以であります。「誠」は人を満足せしめ己れも亦心中清々とするものであります、政黨は果して「誠」を以て眞に國民を満足安心せしめ己れも亦清々として眞に心から喜び満足して居るでありませうか。議員の政見は芝居の科白にあらず、徒らに實行の伴はざる空論を天下に高唱するよりも自ら勇氣を奮ひ眞劍となり第一に「誠」の實を示すことが信用を回復する所以にして何よりも政黨の生くる近道であると存じます。何んとなれば「誠」は第一に私心を去り眞に國家國民の爲になることを心から圖るからであります。私は單に



政黨を批難するのではなく政黨を愛する念よりして政黨の弊を改善し民意暢達上將來正しく明るき政黨に依りて立憲政治に依頼し以て國運の進展を圖らんとするの念願よりして斯く申す次第であります。

聖徳太子憲法第十七條に「夫れ事は獨り斷ず可からず、必ず衆と與に論ふべし」とあります。これは 明治天皇五箇條の御誓文の「廣ク會議ヲ起シ萬機公論ニ決スベシ」と同じ意味にして民意尊重の御精神は一つでありまして朝野共に正しく遵奉して美果を收めざるべからずと存じます。尙獨り輿論を重んずるのみならず平素に於ても、自己に優越權を求め世間に強い人の如く見せることに努めず、廣く相手を尊重する雅量を示し、人言を聽き批判を容れ、彼我融合して「人を見て己れを見ず」といふ狷介狹量を避くべきなりと存じます。

或人は黨費公開を以て政黨改善の唯一の方法なるかの如く唱ふるものもありますが、それも結構ではありますけれども私はそんな會計上のことよりも夫れ以上民意代表の代議士たる國士としての面目本領を國策上に實現することがより以上緊要なりと存じます。從來は餘りにも無責任であり、餘りにも自己の尊き本領を没却するものにあらずや。盡忠報國の「誠」果して如何。恐らく今後は面目一新して眞摯のものたるべしと期待致して居ります。其の覺醒の時期は餘り遠くはないものと存じて居ります。

丁度今朝の新聞を見ますと、鈴木政友會總裁は、輕井澤の別莊にある滾々と湧き出づる泉に比すべき勇氣を以て、政黨政治を行ひ度いとのお話が出て居りましたが、其のお氣持は結構ではありますが、私は百尺竿頭更に一步を進めて之を修正し、滾々として湧き出づる此の泉の如く清冽無垢の「誠」ある勇氣を以て政黨政治を行ひたいと言つて頂いたならば、失禮ながら一層有意義にして且つ大いに權威あるものかと存じます。因に日本人の素質の高潔なることは、日本は到る處青山あり青山ある處清水ありてこの良水に恵まれて居るお蔭である。之に



反し百年河清を待つ濁流の國もあるとの説があります。他國はいざ知らず願くは日本には此の説の事實に現はれんことを心から念ずる所であります。

今や議會の建物も雲霄を衝かんばかりの堂々たる豪壯なる大建築が竣工しました。定めし内部も輪奐の美を極めたものでありませうが、私は同時に中味も堂々たる清く高き國士を以て眞に國事を議し、議會政治の眞髓を發揮し、滿天下の輿望に副ひ洽く國民の敬仰する處となりたいたいものと切に祈つて居ります。若しも大殿堂の偉容成り其の反面に議會制度が非議せらるゝやうなことがありとせば、記念塔として喜ぶよりも却つて憲政史上の恨事なりとして窃に杞憂を抱くものであります。曾つては日比谷の動物園とまで呼ばれ怒號惡罵を敢てし、さては闘牛の場所とさへ言はれましたが、新議事堂は名實共に權威ある神聖無垢のものでありたいものと念願して居ります。元來議事堂は眞劍に透徹したる「誠」を以て國家全體の大事を議すべき唯一の聖堂にして、決して枝葉末節の事項や言葉尻や行掛

りの感情等の小事に囚はれて喧嘩すべき場所にあらず。是れ政府者も議員も互に相手方を尊重し是々非々主義により坦懷以て廣く輿論に聽き、共に國家の大局に立ちて盡すべき處なりと存じます。幸ひ日本には古來武士道なるものあり、能く此の點を補つて居りました。如何に人間は感情的動物なりと雖、隱忍自重して其の職責、其の場所柄を辨へ決して大任を忘るべからずと存じます。私心を滅し利害を追はず赤誠を披瀝し眞摯以て國事に當り眞に明朗清新の信念に生き懇切、熱心に進むならば何を恐れん、議會の操縦工作の如きは第三次にして協調は當然行はるべく誰が好んで紛争を事とせんや。乃ち茲に「誠」を基礎とする所以であります。従來は兎角此の點に缺くる所なかりしかと思ひます。幾千萬圓の費用を投じて小供の遊戯場を造つたのではありませぬ。國務を掌理する政府と選良とが一致和合して國家國民の福利を協議する處にあらずや。而して微々たる私共が今更こんなことを呶々するが如きは笑止の至りにして恰も判り切つたる「誠」を今事



新しく説くと同一ではありませんか。上に立つ人物拂底の今日誰か善導する力ある大人物が奮然出て來ないでありませうか。

私は從來の議員の徽章よりも、ハート型若くは鏡型に「誠」の文字を表現したる徽章を胸間に懸け、絶えず自肅自戒の用に供しては如何かと存じます。更に之を府縣會議員に、又更に之を市町村會議員にも及ぼすならば、彼の悲むべき不名譽の行動の如きは斷じて跡を絶つに至るであらうと信じます。これは決して誇るにあらず冗談にもあらず、眞に憂へ且つ歎くからであります。是は普選の結果一層其の感を深くするものがあります。私はこんな心配は早く消え去ることを衷心より祈つて居ります。議會の神聖は建物や制度にあらず一に其の人に在り。或人は浪人議員は不可なりといひ、或人は自由公平にして可なりと申しますが私には之が判断が付きませぬ。兎に角議員の資質如何が問題であり、其の本は選舉人の鑑別が問題であり、更に其の本は之を鑑別する能力と勇氣とが問題で

あり、又其の本は教育の普及向上であり「誠」であるかと存じます。結局議員の自覺自肅の時を俟つ外なしと考へます。

今や國家内外多事多難にして朝野和協軍民融合舉國一致の秋と叫ばれて居ります際、先づ國內の一致和合が何よりも緊要事と存じます。五本の指が和合して物を掴み得るが如く、所謂「家和して萬事成る」であります。協調の呼吸は恰も二人三脚の競技の如く此の調子を會得せざるべからず。一身を修め一家を齊へ一國を治むるの道は皆一なりであります。願くは私を去り爲にする小智小策を却け、猜疑相搏つを止め又徒らに焦慮せず須らく國家將來の眞の發展進歩の爲眼界を大にし宇宙の大道に基き清く朗かに穩健中正を失はず自肅自彊の態度を以て大和共榮を主とし一に「誠」に終始せんことを切に祈る次第であります。是れ議會の神聖を保ち本義本分を發揚する所以と存じます。

最後に一言致して置きたきことは政府に於ても議會に於ても腰が強いとか弱い



とかいふことは「誠」の大小、信念の分量を指すことにして地方議會に於ける理事者及議員間に於ても亦然りと信ずるのであります。茲に眞摯の一致せんことを冀ふものであります。

### ○ 日本精神としての誠

曾て一時は何も彼も西洋文明に陶醉した有様でありましたが、今や其の本家本元の模範たりし英、米、獨、佛等も何れも政治に、經濟に、軍事に、將又思想に總て行詰つて來たのでありますから此の點よりしても我國は本來の獨自の立場に還らなければならぬことゝなりました。今日では到る處日本精神を唱ふるやうになり一般の思想も氣分も餘程變つて來たやうでありまして洵に喜ぶべき現象であると存じます。今其の好現象を一般の動向を知り得る手近なる方面よりして一例を申せば、先般此の席に於て六代目尾上菊五郎丈は語つて曰く

自分は同輩より變り者として別扱ひにされて居るが、併し是は寧ろ名譽の除外者である。何となれば自分は亡父及び師匠九代目團十郎よりして、觀客に觀て貰ふ目的の爲に藝を勵むやうでは駄目である。觀客が自然に觀に來るやうにならなければいけないと教へられたものだが、今ではジャズとか漫才とかの世の中になつて俳優も觀客も程度が低下して、唯其の場限りに多勢の者が集り手を拍たいて下されば夫れで可いと謂ふ主義となつた。此主義が自分の主義と合はないから遂に除外者にさるゝのである。俳優の苦心の點も今日では一向御客さんが觀て呉れない。併し其の苦心をば見て貰はうといふ氣分を出してはいけない。本當の芝居さへすれば、お客さんが其の場では縦令面白くないと思つても、歸つた後に至り何となく面白かつたといふ氣分が残るものである。例へば勸進帳でも富樫と辨慶とは初めて安宅の關で會ふた、其の初めての問答であるのに、それが芝居では稽古をした通りすら〜と演るからお互に連なり合つて



問答して居る。又辨慶が義經を金剛杖で打擲する時も、富樫は辨慶の腕が上るかどうかといふところに目を注ぐべきである。何故ならば辨慶の腕が上れば本當の主人義經でない譯である、ところが腕が上らなかつたから義經に相違なしと見て取つて茲に富樫は辨慶の孤忠に感激し義侠心を起して、縦令自分は咎めを受けて切腹してもそれは覺悟の前で、義經主従を助けようとした其の眞に迫つた態度を現はして見せることに苦心がある。併しなか／＼観客は其處まで注意して觀ては呉れませぬが、此の頃は日本精神に還れと謂ふ聲が高くなつて來て、隨つて芝居の如きも藝術家として眞劍に演ずるやうになり、俳優も観客も共に態度が變つて來たものゝやうに見受ける云々。

又浪花節の宮川松安氏は曰く、

浪花節は藤原時代に起源したとか申しますが、それは兎に角元來雜駁なもので形も式も一定のものはなく、種々な名前を付けられて居りましたが、漸く東京

で浪花亭主人が浪花節と名付けた位のもので、それから雲右衛門が出て來て大基礎を建て且つ、宮殿下の御前で辯じたといふのが大いに宣傳され、又奈良丸が出で、更に之を擴張流行せしめました。是は日清戦争の後に於て武張つた忠臣義士の説が大いに持て囃された結果である。然るに其の後女流演者が出たり艶物が流行したりして、其の方が却つて堅苦しいものよりも受けが好かつたのであるが、此の頃は又稍々其の趣が變つて、日本精神に還れといふ叫びの起るやうな氣分に伴ひ、再び忠勇義烈の眞面目な演題が流行するやうになつて來た云々。

又木彫家の内藤伸氏は曰く、

木彫の美術は印度より支那に、支那より更に日本に入り來つたものであるが、日本では傳統的に一種の氣高い思想があつて、彫刻に於ても力を専ら崇高な點に置くとか、魂の入れ所に意を注ぐとかしたものであつたが、西洋の美術は寧



ろ飾つた輝やかしいものが好かれ、註文も左様なものが多く、自然彫刻家もさう云ふ時流に随つて居つたが、此の頃は日本精神に還れといふ聲に應じて、矢張り以前の如く崇高なる氣分のもとか魂の入つたものを歓迎されるやうに變化して來た云々。

是等の話を聞いても亦一般の状況を眺めましても、滿洲事變以來又國際聯盟脱退以來日本精神に還れとの聲が高く、即ち政治上なり、法律上なり、學問上なり、藝術上なり總ての思想や氣風が大いに目覺めて西洋かぶれを脱し西洋其の儘の寫眞を離れ、一時よりは餘程良い方に變つて來たことは事實でありまして洵に結構なことゝ存じます。

そこで謂ふ所の日本精神とは、如何なるものであるかと申せば、私は皇室を中心として立つて居る大和民族の偉大なる「誠」と謂ふものに歸着することゝ存じます。

今日日本精神々々々と申しましても之を説明する人は少いのであつて多くは古來の事實を以て説きますが定義的には説かず。菅公の申された和魂漢才といひ或は大和魂とも申しますが内容は明かならず。本居宣長翁は「敷島の和魂を人間は朝日に匂ふ山櫻花」と申されましたが、此の氣持は武士の戰場に於ける場合の如き一時の現はれとしては實に申分のなき立派のものゝ存じます。併しながら常時に於ては、ばつと咲いてばつと散るばかりでなく神州の正氣たる日本精神は永續性にして且つは日本丈けに限ると云ふが如き狭いものではないと考へて居ります。高楠博士は「普遍性、永遠性、徹底性、沒我性、優越性を以て進んで行き、智仁勇の三徳即ち幸魂、和魂、荒魂を磨いて以て即ち生得智たる廣大無邊の大理想を發揚し天照皇大神の大御心に副ひ奉るべきものなり」と説かれて居り洵に明確なる説と存じます。而して私は此の精神を一貫するものは「誠」にありと信じて居ります。之が日本の國體に副ふものであり同時に日本精神であり又之が



世界精神、宇宙精神となるべきものと考へて居ります。日本精神は決して保守的又は排他的のものではありません。

此の倶楽部の社員の村瀬さんの御關係の銀行より發刊せられたる印刷物であつたかと存じますが、次の様な畏れ多いお話が出て居りました。

### ○明治天皇の聖徳と副島伯の誠忠

明治の功臣として聞えたる副島種臣伯は、常に明治天皇に近侍されて居りましたが、或時御前に於て常になく勝れざる顔色をして居られました。後で明治天皇は侍従を召されて、今日副島はいつもになく殆んど元氣が無く勝れざる顔付をして居つたが、あれは何故かと御尋ねになりました。侍従は、副島は此の頃借金に攻められて居りますから多分そのことが自然に顔色に現はれたのではありませぬかと存じますとお答へ申し上げました。ところが天皇はそう

かと首肯かされました。直に金一封をお拵へになり、之を副島の家へ持參せよと御命じになりました。そこで侍従は副島伯の家に行つて御聖旨を御傳へ致しましたところ、伯は有り難く感涙滂沱として之を拜受されました。然る處、翌日伯は右の金封を其の儘奉持して宮中に參内し、侍従にそれをお返しになり、更に御前へ罷出でて陛下を仰ぎ奉り扱て申さるゝには陛下は上御一人に互らさせられ日本國萬民の陛下であらせられます。然るに副島が近侍して居るの故を以て、副島個人に斯く大御心を垂れさせられますことは、所謂一視同仁の御聖徳に反しますから、臣は恐れながら御返上に及びました次第で御座います。と申上げて退出されました。然るに明治天皇は直ぐ其の後で侍従をお召しになつて、急ぎ副島の家に行つて見よ、どうも今の様子では副島は或は自刃するかも知れない。若し左様なことがあつた場合には、朕が切腹罷りならぬと申したと差止めて參れよと仰せられましたので、侍従は急ぎ副島伯方に參りましたところ明治天皇の御



慧眼の程畏し、伯は果して既に白無垢の衣に着更へて、自刃の準備をなされて居りました。仍て侍従は右の御聖旨を傳へ遂に思ひ止まらしめたとのことであります。洵にこのお話を聞くだにも自然と涙がこぼれ、何となく身も心も、しんとするやうな氣持になります。滿洲國皇帝陛下は夙に 明治天皇に私淑尊敬されて居られましたか或人一日右のお話を申し上げましたところ 皇帝陛下は感歎措かせられず、支那四千年の間には皇帝より金封を戴いた臣下はあつたかも知れぬが未だ曾て之を返上したと云ふ臣下のあつたことを聞いたことがない。恐らく副島伯は君命に背くの故を以て自刃の覺悟をなしたのであらう。嗚呼日本には斯の君あり斯の臣あり、日本精神の尊き所以は茲にあると仰せられた趣であります。以上 明治天皇と副島伯とのお話を以て見ましても、こゝに有難き溢るゝ御仁慈の聖徳の大なる現れがあり、又眞に凜乎たる誠忠の籠れるものがあり、君民一體の其の情、其の姿が確かに拜察し得らるゝのであります。斯くの如く「誠」は實際に現

はれて始めて權威が輝くものであります。因みに臣下の筆蹟が大内山に額として掲げられてありますのは獨り副島伯の「楓錦亭」あるのみと申すことであります。

### ○ 實踐躬行の誠

日本は言擧げせざる國民といひて、吾々の祖先は自らの行爲を以て子孫の守るべき道なりと示し、理論を子孫に残されて居らないのであります。即ち皆實踐躬行式でありまして理窟は抜きで不言實行であります。「誠」は言ふは易く行ふは難しでありますか、如何に之を言ふとも行はざれば何んぞ「誠」たる權威が存在しませうか。

「眞知は必ず實行に見はる、知は行の始めにして、行は是れ知の成るなり」であつて「知至れば則ち意誠なり」であります。又「誠あれば則ち明かなり、明か



なれば則ち誠なり」であります。「誠」の主要徳目は久徴、悠遠、博厚、高明にして至誠は神の如しと言はれて居ります。

抑々權威とは徳の謂にして其の徳も道も皆仁を以て一貫するものであります。其の仁は即ち「誠」のことなれば、權威は絶對に「誠」より生れるものでなくてはならぬと存じます。政府でも市町村でも政黨でも個人でも、總て「誠」がなければ何等權威がありません。先刻申しました如く、楠公は一身一家を顧みず、君國の爲に至誠一貫したる忠節の充ち満ちた方でありましたから、後世までも其の權威が現はれて居るのであります。是は天爵であります。足利尊氏は、人爵の權力はあつても天爵の權威がありません。兩者全く方向を異にして居ります。權力者は一時世に憚からるゝに過ぎずして、楠公千載の義烈芳烈に對し北條、足利、今何處に在りやと問ひたいのであります。實に斯く直接に皇室に對する大忠臣の末裔たる楠姓にして今日五爵を拜受したるもの一人もありません程、夫れ丈け一

族一門の悉くが忠節に殉じて死に絶えて居られます。頼山陽の詩にある如く「萬世の下一片の石」しか残らぬ有様であります。其の石の下に無數の英雄が涙を灑ぎ勤王の志士が湧然起つたのであります。之を見ましても、誰か感歎感激を禁ぜざるあらんやであります。天爵は永久不滅であり、實際今日の何々爵と云へる人よりも、遙に高く／＼赫々と輝いて居ります。公の忠節は榮位權勢富貴といふものに超越して君國の爲に義を重んじ死を輕んぜられ且つ御親政に就き後世に涉つて深慮を廻らせられたる誠忠無比の方であつたからであります。又先刻申し上げました西郷南洲翁の如きも翁の爲に死んだ人は澤山ありましたが、誰一人として翁を怨む者はありません。鹿兒島に於ては「せごどん」「せごどん」と申して翕然たる衆望今猶失せず恰も神様の如く敬ひ親の如く慕はれて居るのも、翁が參議であつたとか陸軍大將であつたからとか云ふのではなく、其の聲望は在朝在野たるを問はないのであります。畢竟身を以て事に當るといふ翁の一貫したる至誠に



深く感孚せしめられたる結果に外ならずと存じます。翁は「事、大小となく正道を踏み至誠を推すべし」と常に唱へらるゝのみならず、敬天愛人の實行者でありました。加藤清正、東郷元帥、乃木大將、廣瀬中佐の如き亦「誠」の實行者であります。殊に乃木大將は大楠公に似たる處多し、凡そ人の人たる道は正義道徳を躬行するに在りと存じます。所謂「百言は一行に如かず」であります。

「誠」を以て經濟を行ふた人に二宮尊徳先生のあることは、前に申上げた如く誰も能く知つて居らるゝことではありますが、二宮先生の少し前に恩田木工と云へる偉人がありました。一昨日も一燈園の西田天香さんが、國民會館で此の木工先生のお話をされましたが、木工先生は爾今一切嘘を吐かぬこと及質素儉約を守るを、僅か三年乃至五年の間に完成されました方で、其事績は「日暮硯」又は「木工政談」として書物になつて居ります。「日暮硯」は住友銀行の吉田眞一氏に依

つて、先年廣く知人に配付せられました。今回其の本を後藤内務大臣が全國に配布せられて、官吏訓練の資料となされる趣であります。又天香さん自身も一時は氣狂ひであるとか、胡亂な者であるとかに見られて、何年間か刑事が附纏ふたこともあつたさうであります。氏は正しき信念を實行して居るものであると云ふ信念の下に、何等遲疑する所なく一念堅くして更に轉向されなかつたのであります。それが恰も天香さんの主義と同様なる恩田先生の主義が、今日内務大臣から世に宣傳されると云ふことは、天香さんが轉向せられたるにあらずして、却つて時勢が轉向し、政府の方が天香さんと同様の主義に、轉向して來たものとして誇つて居られる様子であります。右は只時勢の轉回の一例を申したまで、あります。それはさて置き、恩田木工先生は「誠」を以て一切の惡を捨てさせられた所に其の徳があるのであります。木工先生にしても尊徳先生にしても、共に非常なる決心即ち背水の陣を布いて妻子一家を顧みず、決然事に當られたのであります。



して、其の志其の意氣たるや、寧ろ悲壯なるものがあつたのであります。今の中  
央政界の諸公果して這の決心、這の覺悟があつて、身躬ら地方の模範となり、犠  
牲となりて地方に向つて飛込まるゝ眞劍なる勇氣があるでありませうか。大業を  
行ふの道如何。私は恩田、二宮兩先生の如き「誠」を以て實踐躬行せらるゝ、没我  
歸神の行者が再現せられ、或は現に活動して居られる本間俊平さんや國民高等學  
校長の加藤寛治先生の如き人が、どしどしと出られて、地方更生の任に當られる  
日を待つや切なりであります。此の點に於て私は現任石黒岩手縣知事に感謝と敬  
意を表するものであります。石黒知事は一家一心、一村一心の隣保共助の精神に  
依る和合勤勞こそ眞に農村更生の本義なりとし、窮乏打開農村振興の中心は自奮  
自闘に在りとし、燃ゆるが如き熱と凜乎たる勇氣とを以て挺身指導に懸命の努力  
を盡され、其の效績顯著なりと聞いて居ります。同知事は既に在職五六年に及ぶ  
と聞きますが、願くは今後尙五年も十年も勤續して一層大いに治績を擧げらるゝ

やう縣下の爲、國家の爲に切に自愛を祈るところであります。尙此の外に信州に  
於て自力更生の模範實踐者と云はるゝ村長のあることも御承知のことかと存じま  
す。元來牧民の職に在る地方官は他の役人と其の心構へが異なるは、陛下の赤子  
をお預りし之を撫育保護する大責任があるからであります。之には第一に手腕才  
學よりも誠意を以て民心を繋ぐこと、次に私心を去り一身の榮達を度外にするこ  
とを日夜念とすることにして清廉潔白、公平無私、穩健中正、人言を容れ勞を厭  
はず、神佛を崇敬し、古老を敬ひ孝養を重んじ勤儉力行に身を以て範を示し、喜  
悲を民人と共に頌ち、一言一行至誠を致すに在りと存じます。

此の頃盛んに唱へらるゝ選舉肅正の如きも前に申述べた如く、元來誰が斯様な  
ことを唱へなければならぬやうに導いたでありませうか。私は平素に「誠」さへ  
訓練してあれば、今更騒がなくとも當然肅正さるべきものであると思ひます。又  
目下問題となつて居る帝國人絹事件も有罪か無罪かは恐らく無罪でありませうが



併し假りに是が縦令全部無罪としましても誰かの幾人か誠を缺いた者があり、それが原因となつて世人を騒がし法廷を煩すに至つたことは否めない事實であると存じます。「誠」の鏡は昭々乎たりであります。其他學問あり、才識ある大官や政治家や大都市の名譽職の議長議員や會社重役と云ふやうな名士や財閥富豪や巨商や其他教職に在る教育指導者が惜い哉贈賄收賄事件或は詐偽事件等で法廷に問はるゝ者がまごゝと眼前に隨分澤山と出まするが、斯の如く過つて是等小人の世界の觀を呈するのも畢竟皆是れ「誠」を知りつゝも之が決斷の勇氣を缺くからであります。即ち修養足らず意志薄弱なるが故であります。若しも是等の人々が名譽慾や金錢慾に驅られず美はしく朗らかな清慾を悟り人生の尊き所以を知り「誠」を以て私心に打克つ勇氣があつたならば、今日刑務所が滿員で繁昌すると云ふやうなことも更々起らない筈であります。監獄が刑務所と改名せられた位の名や形の改良では少しも罪人が減りません。つまり爲政者の注目すべきところは内

なる心の改良修養に力を盡さねば駄目であります。彼の所謂左傾や右傾や會社ゴロの如きも、名は如何ように装ふとも良心に直面して果して如何でありませうか。レントゲンは如何に胸の中を映すでありませうか。又此の頃各地の富豪の脱税、稅務吏收賄疑獄事件、甚しきは國民を薰育陶冶すべき重大責務を有する教育家の破廉耻收賄等の疑獄事件の如きは如何でありませうか。惜しいかな名譽慾、金錢慾、酒色慾の爲に一身を誤り、一家を傷け父祖及子孫を辱しむる等死屍累々の觀があります。況んや一國の大臣に於てをや。斯くの如く意志薄弱にして人間の本性を失ふに至るのも畢竟是皆平素道德の本義「誠」の修養の缺如せるが爲であります。實に慨嘆に堪えませぬ。昔の疑獄事件には名士の本懐としたる國事犯多かりしも、今は大官名士と稱するも其實殆んど忌はしき金錢の醜問題に累せらるゝもの頻々たりと言ふも不可なき嘆かはしき状態であります。孝經に「身を立て道を行ひ名を後世に揚げ以て父母を顯はすは孝の終なり」とあります。今日の



孝道は何んでありませうか。「道は須臾も離るべからず離るべきは道にあらず」でありまして道とは平氣で生くること即ち疑念邪念を挟まず日々好日の心境にして「平生心是道」であると存じます。行くべき道は種々あるも天地の大道たる「誠」の道を踐み外しては人間の價値がありません。何人も道を行はざる者の身の果ては正に知るべきであり、天は恢々にして夫れ嚴なるかなであります。「父の徳行はその子に對する最良の遺産なり」とは眞實人を欺かずと存じます。

孔子の仁、釋迦の慈悲、基督の愛も皆是れ平和の心になれよと説くものにして、平和の心は畢竟「誠」に基くものと存じます。彼の力士は裸となつて土俵の上で力の眞價を現して居りますが、互に持ちつ持たれつ世を渡り一人離れて孤立の生存は出來ず苟くもこゝに社會を組織して居る以上は互ひ人間の總てが社會の土俵に立つて、衣を通して心と心とがびつたりと相接觸し、眞に「誠」の眞價を現はすやうにありたいものと存じます。「我れ彼の心に入り彼れ我れの心に入

る、二者渾融以て相結ぶべし」であります。例へば双方感慨無量の場合の如き縱令一語の現れ無きも千言萬語に優る至情が相通するが如しであります。或歌に  
わがまことは人のまことに映りたり

偽らざりしを今ぞよろこぶ

言葉の通ぜざる外國人間に於ても心に「誠」さへあれば心と心とで能く意思が相通するのであります。畢竟人生として心の「誠」が第一要件であります。

私は「誠」を以て事業に當り、「誠」を以て金を貸し「誠」を以て金を借り、「誠」を以て金を返へし、以て眞正なる「誠」の事業を營むやう私共は實業方面の進歩發展上よりして特に其の必要を痛感し、且つ祈願する次第でありまして、更に政治其の他全般に涉つて何事にも一に「誠」に依つて解決せらるゝものと思ふに其の必要を叫ぶものであります。「誠」の實なくして何んぞ産業が振興しませうか。「誠」の實なくして何んぞ政治が行はれませうか。「誠」の實なくして何



んど國家が隆昌に赴きませうか。「誠」の實なくして何んど部下の統一が出来ませうか。「誠」の實なくして何んど人間が存在し得ませうか。結局一身一家一國の興亡盛衰は「誠」の實在の大小如何に在りと存じます。兎角好ましからざる世の問題となる人は、縦令手腕力量があつても、惜いかな何處かに「誠」の徳の足らざる人と存じます。神の明鑑は申すまでもなく大衆の心眼も亦悔るべからざるものであります。

先刻申述べました「全體醫學」のこと、又私が假りに名付けました「全體手形」「全體證書」のこと、即ち一局部のみに偏せざる全體主義の觀念を更に廣く擴大して申しますれば、今日の大問題たる國防完備なり、健全財政なり、貿易及産業の振興なりに致しましても、當事者間に共に眞の國家全體上より發する「誠」を披瀝して、文武一致し克く我國の現在と將來との情勢を綜合考覈し大局的見地を以て是等の協力調和宜しきを得て大乘的に解決し、以て我國運の進展を圖り國威

を世界に輝やかすべく善處せられんことを冀ふと同時に、又之が攝理裁量の任に當る經世の責任ある政治家たる統率者は、平生の抱負經綸を以て確固たる方針を立てるは勿論、能く内外の時勢を洞察し、不動の信念識見を有する人、極めて勇氣あり力強き「誠」の人、極めて氣宇の廣濶なる人、特に熱あり手腕あり力量ある重厚の人格者であつて、武人の心も衆庶の心も資本家の心も労働者の心も取り入れる人、全國民が安心して信賴する徳望ある權威の人でなければならぬと存じます。況んや躍進日本、非常時日本に於てをやであります。

統率の眞義は「誠」であります。この頃は何事を問はず殊に産業に對し一にも二にも統制々々と唱へますけれども、燈臺下暗し他人のことよりも膝元の人事行政の一絲紊れざる統制即ち内輪の一致和合の方が重要なる先決問題であると存じます。殊に國策及外交方針の統制は如何でありませうか。果して官民一致の確固不動の信念ある方針が立つて居るでありませうか。大衆は如何に見て居るであり



ませうか。須らく心を廣くし胸に手を當て耳を開いて聽くべしであります。國民は自由主義とか統制主義とか官僚政治とか將又政黨政治とかの名稱よりも實質本位を以て其の良否に關心を持つこと大なりと信じます。故に何よりも先づ國民生活の安定上價值ある實績を擧ぐることに肝要なりと存じます。右の如く統率の眞義は「誠」にして總理大臣の閣僚を統率するも「誠」各省大臣の部下を統率するも「誠」軍隊の統率も「誠」なれば下つて種々の會社及組合又は協會の統率も「誠」にして、數へ來れば皆悉く「誠」が主たらざるはなしと申すべきであります。されば正義人道の上に「誠」さへ充實すれば事は求めずして成る。又自ら行ふて正しければ令せずと雖行はるであります。「誠」が薄弱にして徹底せざれば求むると雖萬事崩壊すべく、其の成否は一に懸つて「誠」の如何に依ること、信じます。「誠」は洋の東西を問はず實に人生の本能であります。

よく鼎の輕重を問ふと云ふことを申しますが、これは昔支那に於て大臣となり

宰相となり諸政を變理する時、鼎の中に五種の物を入れて煮て、之を神に供へることが例となつて居りましたが、是は政治上に於て斯くの如く種々のものを一緒に煮るが如く調和宜しきを得せしめますとて神に誓を立てるのであつて、單に神に御馳走をしてお祭をする意味ではないさうであります。又其の器の鼎の足が三本ゆゑに其の何れの一本にても損せば顛倒するから足下安立せざることになり、調和宜しきを行ふ政治が出来ぬ故に、土臺のぐらつくこと即ち一致協力を缺くとを大臣の力の輕重とて云々し、協力を統率する力如何を之を鼎の輕重を問ふと云ふことになつたと云ふ説があります。少しく附會の如くにも聞えますが一説として聞くべしと存じます。要するに國內の一致和協の團結力に依り中心は不動にして金鐵の如く鞏固なれよ。足は確かにふん張りて地に着けよと申す次第であります。所謂「病は内に在り」でありまして兎角内輪より罅が入り易きが故に内部の一致和協は最も大切にして深く猛省を要する次第であります。此の文武百政の



調節萬民の統率宜しきを得る力量あり「誠」あるものは即ち眞に宰相たるべき人なりと信じます。最も崇高なる政治は強き倫理化であると存じます。彼の五・一五事件の如きも可否は別として其の動機は政治の腐敗に因を發すと言はれて居りますが私も或は然らんかと存じます。夫れに就て想ひ起すことは内閣總理大臣中に於て曾て田中大將時代が最も政治が腐取し國民の信望を失ふたと言ふ世評もありましたが果して如何でありましたか。併し之を濱口總理に比し政策の可否は別として其の緊張振り其の眞摯振り其の信念振り其の國民の信望の實が如何であつたでありませうか。是は國民一般の判斷に任かす次第でありまして私が批判することは差控へます。尙序に申し上げますが昔は勿論明治時代でも大臣は死を以て事に當られたのであります。其の一例は明治二十五年松方内閣の瓦解に際し侯が殿下に咫尺して骸骨を乞はるゝや、明治天皇は朕には辭職なしと仰せさせられ、伊藤公は感涙座に耐へず、直ちに元老を集めて敢て身自ら此の難局に當らんと申出

られ、一大決心を以て組閣せられたることは一に 陛下に對する赤誠の現はれであると存じます。而して其の際陸奥宗光伯を外務大臣に起用せらるゝや、伯は病餘にも拘はらず敢然受諾せられ親任式の當日博士橋本綱常國手を招き餘命幾何やを診斷せしめ、三年との診定に依り其の間に爲すべき外交國策の豫定を作り彼の紛々擾々たる治外法權撤廢の條約改正を僅々八ヶ月間に成就せしめ、次に朝鮮の大事變あり、尋で日清戦争の起れるあり能く之に善處せられたることは、實に死を以て事に當られたる赤誠に出づるものにして、流石は日本第一の外務大臣の稱ある所しかと存じます。右の如く伊藤公といひ又陸奥伯といひ共に決死の覺悟のあつたことを明かに察し得らるゝのであります。濱口氏の如きも亦眞に死を覺悟して不動の信念を以て難局に當られたるものと存じます。國士たるもの何ぞ死を恐れて可ならんやであります。現今の人愧死するところなきか。己れを愛惜するものは覺悟なく信念なしと評せらるゝも敢て辯解の辭なかるべきかと存じます。



又法案政策に協賛を與ふる議員は條件として第一に質の良好眞摯なること、第二に理想を實現するには數が力でありますから、正しき國民總意の代表者として其の數の多きことを要するのであります。夫れ故に其の階段として選舉肅正の清き一票を叫ばるゝ所以も亦茲に在りと存じますが、是は畢竟何れの場合に於ても根本は平生の「誠」の現れでなくばならぬと深く信ずる次第であります。何人も心の底に迫力ある強き「誠」さへあれば、辯舌や手段の巧拙の如きは第二、第三段であり何んぞ意とするに足らんやであります。若し「誠」の上に手段の巧妙なるものあれば、夫れは鬼に金棒であり、之に反し手段のみ巧妙にして「誠」無きものは、金棒のみあつて鬼無きに等しきものと存じます。徒らに實行の信念なき御座なり主義ともいふべき政策の羅列のみにては、自然人心を離るゝことになりす。彼の外交の如きも結局最後のところは口の人よりも肚の確つかりと据つた人に在りと云ふことに歸着致します。彼の外務大臣として名聲噴々たりし故小村

壽太郎侯の如きは體小さく口數少なりしも、膽斗の如しと申しますか肚の外交家なりしと言はれて居ります。學問でも鼻の先にブラついたり、頭の邊や口先のみぞ走りたりするものは片々たる浮いた人物であります。不動の眞理が深く強く肚の底に藏つた學問でなければ眞に生きたものとは言へませぬ。人と人との協力も肚と肚との結合で成るものであります。大事を決せんとせば先方の鼻息を窺ふが如きことなく、眞に肚の確つかりと据つた人たるを要し、殊に今時に於て其の必要を痛感する次第であります。而して肚そのものは畢竟「誠」に安立するものでなければならぬと深く信じるものであります。

「誠」と云ひ、道德と云ふも、私は徒らに溫柔羊の如き社會を造れ、或は仙人の世界を造れ、若しくは孤立潔癖で獨り尊しであれとそんな野暮なことは申しませぬ。熱あり勇氣あり力ある「誠」を以て積極的に現世に向つて活動せよ、此の活きた世に活動せんとするには人間道の「誠」が第一の資本であると唱ふるのであ



ります。是は人間の精神の根本に向つて叫ぶのであります。彼の一種の所謂宗教盲信者と云ふ風に一方に捉はれ凝り固まるにあらずして、内に信仰心を以て迷はず謬らず力強く清新快活の氣分を以て、外に希望を現世社會生活の日々に現はせよと言ふのであつて、新島先生の信條とせらるゝ「良心を手腕に活かせ」と言ふことでもあります。

人生の行路としての覺りは、身體、精神、物質の惱みを現在より去る工夫でなければならぬ。安んじて死に行く力にあらずして、安んじて生き得る力でなくてはなりません。更に申せば「誠」を根本としたる聰明英智を以て道ある道に向つて大いに働き大いに活躍せよと言ふのであります。「誠」の人を指して鈍感愚直者の如く言ふ人は、斯く評する人が働きと正義本道とを混同して居るものにして耳を傾くるに足らざるものであります。私は常識を本として精神的にも物質的にも將又算盤的にも何れの一方にも偏せず「物心依一」で進んで行きたいものと念

願して居ります。私が「誠」を説くのは實社會の正義が段々と破壊せらるゝ實況を見て、社會に「誠」の本義を活かして行きたいと申す次第であつて、之が私の實業界に向つて提唱する「誠」であります。

抑々社會は自然の産物であり生きものである以上、平々坦々と仙郷の武陵桃源を夢見て居る譯には參りませぬ。雨もあれば嵐もある、山もあれば川もある、所謂人生の行路崎嶇多しであります。且つ社會は競争場裡であり優勝劣敗は免れざる處であります。而して自由競争あるが爲に實は勇氣も出で勉強も爲し又大いに進歩するのではありませぬか。されば自由競争は寧ろ文明進歩の母であります。併しながら人に迷惑を懸け不義を敢てしてまでの競争を意味するにあらず。不合理不正の競争は絶対に不可でありますから、茲に取締上統制の必要を生ずるのであります。統制は國家全體なり國民全體からの統制でなくてはなりません。元來自由も統制も共に自然の限界がありますから之が調節宜しきを得るの必要があ



ります。若しも統制の度を過ぎ或は局部的統制となれば却つて統制の爲の統制となり金縛りの憂目を見るに至りませう。況んや權力を以て國民の輿論を統制壓抑せんとするやうなことありとせば、其の結果はかへつて商工業の不振を招きませう。尤も獨逸の場合の如きは別問題でありますが其の獨逸でさへも將來統制に行詰ることなきや疑なきを得ません。我が國にては折角中世の抑壓主義を解いて明治の御代に入りて自由を許されたのではありませんか。私は統制は寧ろ公共性の立場よりして當業者自ら進んで國家の爲自己擁護の爲大局的見地に立ちて自治計畫するを以て最も適正有效なりと考ふるのであります。然らざれば寧ろ進んで事業の大合同を爲すに如かずと存じます。兎に角根本としては「誠」を離れざる競争を以てせざるべからず。「誠」を離れたる競争は、後軍の續かざる戦争の如きもので永續性がありません。茲に於て平素何人も先づ他人に先だつて自己を全觀し己れ自ら「誠」を實行するの心掛あるを必要と致します。各自の一人一人が他

に先んじて「誠」を行へば、則ち一人の「誠」は萬人の「誠」となり、茲に「誠」の人「誠」の社會「誠」の世界を造り得るのであります。常に「誠」を體し一步心を高きに移さんか畢生を通じ未來永劫まで到底金錢に換へ難き愉快を感じ、且つ尊き幸福を招來するものと信じます。安心立命の眞美も茲に存するのであります。「足る事を知るものは常に富む」と申しますが私は「誠を知るものは常に幸福なり」と申したのであります。

凡そ人として尊き所以は心であり「誠」であつて金や手腕は従たるものであります。茲に人格を必要と致します。カント曰く「人格とは道德律に従つて合理的行動を爲すものを謂ふ」と。尤も世の中は益々複雑化して參り直線のみでは涉れません。曾ては「善」の押賣りをなさんとして却つて失敗したる大都市の人格市長あり、固より宇宙萬有皆陰陽あり表裏あり世に屈伸の理あり、私は敢て馬車馬的であれ頑強であれとは申しませぬが「誠」の使用方法は種々にして一様ならず



時と場合とに依りて或は陰性となり或は陽性となり伸縮自在となるを要し單に一本調子のみにては失敗を招きます。此の故に時に清濁併せ呑み又恰も鯉を釣るが如く急に糸を引き難き場合もあり、侃々諤々も時に依ることあり、滑稽洒落も世道人心を啓發することあり、硬軟緩急宜しきを得るの必要なることは勿論であります。併し餘りにも近時の如く誤つて曲線のみを以て、眼先の其の場當りで世を涉らんとする人の多きを甚だ遺憾とするものであります。萬象皆悉く心の所現にして心は必ず色に現はれ事に發す。心に鐵石の如き堅き信念あれば何物か恐れんやであります。「天は海よりも大にして心は天よりも大なり」といへることがあります。故に私は其の一貫したる根本義として心を第一とする「誠」の不變實行の必要を茲に申述べたる次第であります。敢て自重自覺を乞ふ所以であります。

## ○裏面より見たる誠

ある人曰く更に靜かに觀ずれば我々は轉變極りなき現象の活きたる此の宇宙に生れ活きたる人間として、此の晴雨不定の天地間を歩む以上は、世の表裏を洞察せず單に「誠」の一點張で歩むことは出来ませぬ。さればとて不誠實を働いても宜しいと速了せらるゝことは無論本意ではありませんが、現に歐米の天地は如何、表面には全世界の平和と全人類の幸福を唱ふるも、其の裏面を眺むれば弱肉強食の有様で何處に「誠」が存在して居りませうかと言ふものもあります。是も一應尤ものことゝ存じます。然らば如何にせんかと言ふに、我々は彼より挑戦を敢てし爆彈が降り来るならば之を防禦し之に對抗する用意を必要とすと云ふに過ぎません。抑々季節に春夏秋冬の同じからざるものあるが如く、人には悲喜劇あり善惡貧富の別あり山河一體ならざるが如く、國に強弱あり版圖に大小あり平ならんと欲して平なる能はず、誰も彼もが一色一樣ならず年が年中四海波靜かに春風駘蕩の豊かさに恵まれ得ないものであります。今日の國際聯盟や軍縮會議は眞



に平和の正義に出發せるか、果して人道を尊重せるか。又イタリー對エチオピア國問題にしても英佛は正義人道に發せる仲裁であるか、自國の利害を根柢としたる御都合に依る卑劣なる自己的協定なるか、乃至今後の救援も全く自己の打算上より決するにはあらざるか、何れにしてもエ國は恰も強國の俎上の肉と等しき感を禁じ得ないのであつて是では世界の正義人類の幸福は何處に求むべきでありませうか。茲に於て乎天道是耶非耶の嘆聲も無理からぬことゝ存じます。併し我々は宜しく攻めず戦はず正義と「誠」との最大武器を以て其の頑迷獸慾の蒙を啓き其の不信不法を膺懲すべきであると存じます。皇道政策は須らく霸道政策を征服すべきであります。

## 國際聯盟脱退の御詔書中に

信を國際に篤くし大義を宇内に發揚すべし

と御示しになつて居ります。國際聯盟は元々不純勝手なるものにして某國の傀儡

との評あるが如く本心は決して大義を以て眞に公正に世界の平和を計畫したるものではありませぬから、愈々出でて愈々醜といふべく、會議毎に無力を暴露し權威を失墜し今日では聯盟自らが行詰つて居る自殺の状態であります。是れ畢竟正義といふ「誠」より出發せざるが爲であります。

凡そ不自然のもの即ち「誠」に反したるものは永き間には天の勸善懲惡の制裁もあれば又自然の調節もあり、運命の循環もありて結局獨りて思ふ様に勝手自儘はなし得られませぬ。尙一例を申せば、彼のナポレオンよりも以上に廣大なる世界の土地を征畧せる一世の豪傑成吉思汗も今や其の領土の片影だも見ざる有様ではありませんか。是は天の裁きと申すべきであつて、即ち彼等は一時の風雲に乗ずる自我的の英傑にして侵略を主眼として眞の「誠」を持せず精神的文明の中に認め得られざる道徳上の缺點があつたから永續しないのであつたかと存じます。現に米國のハウス大佐、英國の前藏相スノーデン氏の如きは「世界各國の領土及



資源が不公平である爲に日、獨、伊の如きは膨脹又は爆發するは止むを得ぬから國際新平和案として大國は大度を以て資源の均衡を謀り其の一策として宜しく植民地再分配を考慮すべきなり」と聲明して居ります。之は刻下の實際的生存權問題であり、又國際正義の勃興なりとして傾聽を禁じ得ませぬ。蓋し外にはみ出るは猶空氣の厚きより薄きに移るに等しく眞理であり此の眞理を阻むものは宇宙の眞理の反逆者であります。故に共存共榮の心を以て世界人類の幸福を圖り平和を得んとせば、持てる國は持たざる國のことを我が身の如く考ふべきであると存じますが、恐らく自發的に資源の分配が出来ずして、寧ろ世界は再び戰禍を見る可能性が多分にあるやうに思はれます。吾人は敢て干才に訴ふることを唱ふるものにあらずして、大國が「誠」よりする反省あらんことを求むるものであります。英國の如きは餘りにも世界到る處に尨大なる植民地を占有し過ぐるが故に常に絶えず他國と利害の衝突を招き易き次第であります。而已ならず國際聯盟を利用し

て日本を抑壓し己れの經濟市場を擅にせんとして失敗したではありませんか。又米國はモンロー主義を棄て遠く東亞にお節介を試み何等利益する處なく却つて不評判を買つたではありませんか。大國よ眞に世界平和の爲を思念するならば宜しく優越感を捨て同時に餘れる資源は之を解放分讓するの襟度あるべきなりと存じます。日本も人類の生存權擁護の人道よりして遠慮なく大いに主唱して可なりと存じます。歐洲大戰後オースタリーは「我々は大腦のみ残されたる國にして消化器がなく四肢がもぎ取られて居つて如何にして生存が出来るか」と云ひ。隣りのハンガリーは「我々は豚の尻つぽばかりを残された」と云ひ。夫れ、不平悲憤を洩らして居る状態であり、況んやドイツの如きは當時米國の大統領ウエルソンが聯盟各國に忠告せし通り過酷の處置なりし爲に其の不平怨嗟は固より當然であります。要するに持つ國と持たざる國との争となりました。只時の勢は潮流の如く之に逆ふて利あらず、豫め之を測知して利用すべきであると存じます。ナポ



レオンでさへ世界の高潮には抗する能はずと嘆聲を發したものであります。

歐洲大戰後には思想の搖撼を來たし、露西亞はソヴェエトとなり、伊太利はフアツシヨに獨逸はナチスドイツに土耳其はケマル・トルコに其の他ベルシャも變り、西班牙は今や革命の最中であり何れも政治經濟の機構に世界的變更を見るのであります。正義も實力の伴ふたものでなければ役に立たぬと申しますが併し年中軍事のみで平和が保たるゝものでもなく根本は矢張り道德仁政に依つて破壊を防止して居るのであります。若しも世界に之を調節指導する人物がないとすれば只世は殺伐となり軍事國防にのみ競争して世界は魔の海と化し没落の進路へと馳するでありませう。歳出豫算の増加、赤字公債増發及増稅等推して知るべく、茲に於て世界的に大聲を發して「誠」を呼號する所以であります。一口に云へば外國は道德原理に缺くる處ありて到底我が徳治國には及びません。世界を共存共榮の家族生活に導かんとするものは唯獨り我が國のみにして是れ我が國體の

萬邦に冠たる所以であります。

今日の世界は文化の靡爛とも申すべくどうも世の中が餘りに逆行するときに、一時は人が天に勝ち之を裏から見ると「誠」が影薄くして實現の效果少なく、善いのか悪いのか聊か頭が昏迷するが如き感なきにあらざるも、更に冷靜に之を大局より見れば矢張り何等迷ふことなく、當然「誠」に歸着するものであります。矢張り「天定つて人に勝つ」のであります。茲に於て詮ずる處長き期間に於ては正義を以て奮闘努力以て彌々益々「誠」の眞理大道に勇往邁進するの外なしとの結論に落つることになるのであります。私は文明とは道義の普く行はるゝものを指すことゝ存じます。何んとなれば道を行ふは人間の本務なりと信ずるからであります。要するに物に本末あり事に終始あり一時的の現象と永久の結果とに道程の差異あり、縱令其の見方に就ては表裏あるも自然の法則は「誠」であります。即ち「誠」は泰山不動でありますから徒らに白雲の去來に迷ふこと勿れと申すの



であります。

昔、山崎闇齋先生は其の門弟に問ふて曰く、我々は斯く孔孟の學を奉ずるものであるが、今若し孔孟が軍を帥ゐて我國を襲ひ來らば如何にするかと、門弟啞然として答ふる所を知らず。そこで先生曰く孔孟若し襲ひ來らば我等は直ちに之と戦ひ孔孟を或は虜にし或は斬つて捨て以て國恩に報ぜんのみ是れ孔孟の學なりと申されたのであります。流石に先生は易學に厚く天地自然を基礎とし、穩健にして見識高く我國體の中樞を誤らず常に大義に立脚し名分を明かにしたる碩儒であると敬服致します。更に其の門下より一層剛毅峻烈にして君位正統論を唱へ贊を列侯に執らず仰ぎて君となすは獨り天子あるのみと主持したる淺見綱齋先生を出したるも宜なりと謂ふべしであります。學問の活用夫れ斯の如く本末の分それ斯の如し「誠」の理も亦斯く活用すべきであると存じます。古來我が國の誇りとする處は「誠」の上に毅然として終始一貫するからであります。神代以來單に従順

が必ずしも「誠」にあらず基督と雖歴史を顧みよ。況んや今日のソ聯及英米の如き我に及ばぬこと遠し。茲に和戰兩様の準備が必要であります。

今や世界の情勢は天道に反し侵略主義を以て未曾有の軍備擴張に専念す。隨つて我が國も軍備の一日も忽にすべからざる事情にあるは止むを得るのであります。併し斯くては年々膨脹する軍備國防費は經濟界の實情及生産能力より見て財政經濟の上に安立せず、物價の騰貴、對外爲替の低落、悪性インフレーションを招くの虞あるのみならず、若し各國と軍備を競争することゝなれば我一を増せば彼れ大國は三を進むることゝなりて際限なかるべく、假りに二三年は忍ぶべしとしても到底永く我が人の數の力及財力の對抗し得るところにあらずと前途を憂ふるのであります。殊に孤立は獨立にあらず、況んや孤立の持久戦なるに於てをやと思はれます。私は敢て軍事を論ずるにあらず、又外國の侮を受けざる用意の必要なること及武力なき外交の軟弱なることも能く承知して居りますが、果して彼



れ我を攻め来るやは疑問にして又戦へば必ず勝つてありませうが、先づ軍事の前に平素に於て平和と生活安定の爲に善隣友好及萬邦共榮の趣旨に基き「誠」を以て國際不安を除去する皇道外交即ち正義外交、平和外交の手腕を大いに揮ふべき秋なりと存じます。世には外交が岐路に立つとか或は二元外交とか申しますが斯かる筈なく私には如何なるものか事實が判りませぬ。元來確固たる一定の國策がある筈であります。随つて一定の方向もある筈であります。若し之なしとせば大問題であります。果して如何でありませうか。兎に角一面には文武一體となり融合和協して明朗に各其の本分を盡すことが刻下の急務なりと痛感する次第であります。

平和の保證たる軍備の擴張も世界何れも財源と資料の不足を來すべく到底無限に互に競争は出來ない筈であります。されば結局戦争を起して勝敗を決するかでありませんが、勝敗何れにしても慘禍と戦後の困憊は明かでありますから、之に先

だちて軍縮を協定して平和保全を爲すの外なしと存じます。蓋し其の時機は案外早く來るにあらずやと想像せられます。外交には虚々實々の手段ありと申しますが、私は正義人道の上に立ち確固不動の信念あらば何をか恐れんやであります。

伊藤博文公曰く

人種が違つても言葉が違つても互に諒解するものは只「誠」である。正金は何國でも適用する贋造紙幣は決して永く通用しない。この「誠」を心に抱いて世界萬國を潤歩するのが日本國の道である。

と、私は各國とも軍備擴張に熱中せるものを轉じて「誠」の擴充に熱心に力強く競争努力せられんことを望んで止まないものであります。是は殊に道義に富める日本の努むべき道ならずやと存じます。

### ○軍紀としての誠



我が國で一番眞劍なるものは軍であり、一番尊敬せられ一番信賴せられて居るものは軍であります。勅諭に對しては一點背くべからず。軍紀に對しては一點犯すべからず。之を奉ずる所以のものは萬邦無比の國體に生を享くる皇國の軍人たる魂と其の奥には至誠といふ道德精神が燃へて居るからであると信じます。國民道德の精神は皇軍に在つては即ち軍人精神であり皇軍の誇は道德規範に立つて居るからであると存じます。

明治天皇の勅諭の大意に

- 一、軍人は忠節を盡すを本分とすべし。
- 一、軍人は禮儀を正しくすべし。
- 一、軍人は武勇を尙ぶべし。
- 一、軍人は信義を重んずべし。
- 一、軍人は質素を旨とすべし。

右の五箇條は軍人たらんもの暫も忽せにすべからず。さて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ、抑々此の五箇條は我が軍人の精神にして、一の誠心はまた五箇條の精神なり、心「誠」ならざれば如何なる嘉言善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき、心だに誠あれば何事も成るものぞかし。況してや此の五箇條は天地の公道、人倫の常經なり、行ひ易く守り易し、汝等軍人、能く朕が訓に遵ひて此の道を守り行ひ國に報ゆるの務めを盡さば日本國の蒼生、舉りて之を悦びなん、朕一人の憚びのみならんや（明治十五年一月四日）

五箇條の精神は「誠」に歸一すとの聖旨炳乎たりであります。名古屋の第三師團司令部前の記念塔には右の五箇條が記してあつて其の上部に「誠」の文字を冠してあります。即ち五箇條の精神は誠心なりとの御趣旨を現はしたるものと存じます。大正天皇 今上陛下共に右の御遺訓に遵由し本分を守り一誠以て報國の義を示し給はざるはなしであります。又讀法に



第一條 誠心ヲ本トシ中節ヲ盡シ不信不忠の所爲アルヘカラサル事

第二條 長上ニ敬禮ヲ盡シ等輩ニ信義ヲ致シ粗暴倨傲ノ所爲アルヘカラサル事

第三條 長上ノ命令ハ其事ノ如何ヲ問ハス直チニ之ニ服従シ抗抵于犯ノ所爲アルヘカラサル事

第四條 膽勇ヲ尙トヒ軍務ニ勉勵シ恐怯柔懦ノ所爲アルヘカラサル事

第五條 血氣ノ小勇ニ誇リ争鬪ヲ好ミ他人ヲ侮慢シ世人ノ厭忌ヲ來ス等ノ所爲アルヘカラサル事

第六條 道德ヲ修メ質素ヲ主トシ浮華文弱ニ流ル等ノ所爲アルヘカラサル事

第七條 名譽ヲ尙トヒ廉恥ヲ重ンシ賤劣貪汚ノ所爲アルヘカラサル事

とありまして何れを拜讀しましても皇道の本義を宣揚し給ひ至誠以て本分を守り忠君愛國の精神を盡すべしと御示に相成つて居ります。忠節、禮儀、武勇、信義、質素の五徳は軍人のみならず大和民族の遵由すべき「誠」の道であります。此の

聖旨に副ひ奉れば世は何事もなく益々富國強兵の實を擧ぐることに存じます。

#### 軍隊教育令に

夫れ生を棄て、義を取り恥を知り、名を惜み、責任を重んじ、艱苦に堪え、奮つて國難に赴き悦んで任務に斃るゝは我國民の古來繼承遵由せる大和魂にして、特に軍人に必須の資性なり。故に軍隊教育に於ては此國民性を砥礪擴充し以て事實上に其の成果を發揮せしめざるべからず。

と即ち軍隊教育の根基を國民精神の發揚に置いてありまして、是れ外國と觀念を根本的に異にして居る點と存じます。故に軍人は軍紀を守ると同時に皇道に即せる道德的存立として見識を高め質實剛健の氣風を馴致し忠誠信義を重んじ良民たる儀表となり以て國民精神作興に資すべきものと存じます。夫れに就て茲に最も注目すべきは軍人の生活は能く軍紀を守り之を實行し其の本分に従ふことである。即ち統御と服従とであります。以て上下の信賴和親が維持せらるゝのであ



ります。斯くて國民道德の基準たる「誠」を以て一身を抛ち君國に報ずるものは神座に列することを得るのであります。曾て日露戦争に於て、東郷元帥の下に參謀として英名赫々たり又名文を以て稱せられたる「舷々相摩す」の執筆者たる海軍中將秋山愼之氏は大正二年二月「軍紀の整肅」と題して軍事新報紙上に左の論文を掲載せられて居ります。

軍紀とは軍隊の紀律(Discipline)の意義にして、其整肅とは、下克上に服し、上亦下を信じ、法令確實に遵守せられ、節制嚴正に履行せらるゝを謂ふ。就中其主眼たる要點は各員の其上長に對する服従是れなり。但し此服従は能く上長の意志を體し、之れに添はんとする義心より發するものにして、無意識の奴隸的盲従と混同す可からず。上長の命令には素より絶對的に服従せざる可からずと雖も、其實行には獨斷專決を要すること多し、服従と專斷とは正に相反するが如くにして、其實は然らず。命令に指示する事項は概ね細末に亘らざるのみ

ならず、常に必ずしも未然の情況に適應せるものにあらず。故に其實施に任ずるものは能く臨機處斷して、發令の目的を達成するの手段を選ばざる可からず。是れ實に上長の意圖に添ふ所以にして、敢て服従せざるにあらず。情況已に變化せるにも拘らず、依然死令を墨守して其責任を恐るゝが如きは偶人と相距ること遠からざるなり。此軍紀は軍隊の結合力を保持する唯一の生命にして、之れ無くして、一日も存立を許さざるのみならず、之れが整否の程度は其實力を消長し、其眞價を高下するものなり、軍紀の整肅せる軍隊は對敵に際し、全軍の意志を一致し一目的に對し其全力を集中し得るが故に、縱令其方法を過ることあるも、能く諸種の危険に抗し、多大の困苦に耐へ、以て最終の効果を奏することを得。之れに反し軍紀弛廢せるものは、假令其隊制整美にして、隊員の技能優秀なるも、意志の統一なき烏合の兵衆に異る處なく、艱難缺乏に遭遇して忽ち屈折瓦解するを常とす。



決戦已に我が捷利に歸して、士氣頓に昇り、將に總追撃に移らんとし、或は先を争ひ各自の功名を望み、或は倦疲の極、自己の安息を願ふものある場合に當り、軍紀は勇者をして濫りに進ましめず、怯者をして恣に退かしめず、尙ほ良く全軍の秩序を維持して其結合を弛めず、以て有終多大の戦果を收穫せしむ。又戦闘利ならず、我損害甚しく、隊制已に亂れて其團結を失ひ、爲に大いに戦闘力を減耗せる場合等に於ても、軍紀嚴肅なるときは、須臾にして此悲境より恢復し得れども、其然らざるものは益々崩亂支離滅裂の危殆に陥り、終に又收拾す可からざるに至ること、古來海陸戦例の明證する處なり。獨逸近世の兵家ブルーム將軍は士氣と軍紀とを比較して左の如く説けり。

「士氣ハ兵戦ニ於テ百事ヲ助ケ、又能ク人力ヲ昂起スルガ故ニ、極メテ貴重ナルモノナリト雖モ、之ヲ維持スルコト頗ル難シ、慘烈ナル實戦ニ臨ミ、絶エズ多少ノ奏功ニ依リテ之ヲ奮勵スル能ハザレバ反ツテ容易ニ冷却シ去リ、

之ニ屬シタル希望ハ忽チ消滅スベシ。戦時長時日ノ困苦缺乏ニ惱ミ、或ハ數時間ノ久シキ、爲スナクシテ敵火ノ中ニ伏シ、或ハ又敗戦ノ後、勝敵ニ追撃サル、トキハ、人心復々昂進ノ餘地無ク、一軍ノ安危ヲ士氣ニ委セントスルモ得テ望ム可カラザルナリ。此ノ如キ場合ニ際シ、能ク軍隊ノ連結ヲ保持シ、一旦失ヒタル秩序ヲ恢復シ得ルモノハ、唯軍紀ノ力アルノミ。」

士氣は内部の亢奮、外部の刺戟等に依り、比較的急激に昂進するも、低落も亦迅速にして、其盛衰の變化凡て一時的なるが故に、到底永久之に信賴すること難し。軍紀心に至りては、長時の慣養に成れる第二の天性たるを以て、身邊の光景、四圍の状況等の爲に容易に消長することなく、一苦一難を加ふる毎に益々其強度を高め、能く全軍を鐵石の一塊たらしむ。故に曰く「士卒上命を畏るゝこと敵より大なるものは必ず勝つ」と。軍紀の振肅せる軍隊には、天地間恐るべきもの無く向ふ處敵するものなし。軍紀の軍隊に貴重なる斯くの如く然り。



故に我軍の實力を優秀ならしめんと欲せば、第一に軍紀の整肅に力め、他隊の眞價を知らんと欲せば、先づ其整否如何に着眼せざる可からず。然らば如何にして此軍紀の整否を判別し得る乎、其觀察點素より少からずと雖、先づ其根源に溯り、左記の七件に着眼するを可とす。

- 一、職責を尊重すること。
- 二、任用を公正にすること。
- 三、賞罰を信明にすること。
- 四、指揮を統齊すること。
- 五、法規を勵行すること。
- 六、禮式を確實にすること。
- 七、教練を嚴肅にすること。

此の七件は素より軍事の常經、終始斯くならざる可からざるものにして、特に

軍紀を整肅するが爲の手段にあらず。然れども、本來軍紀心なるものは心性に屬し、其一部は自他の分限を悟得せる理性に發し、又一部は上長を最敬する感情に生ずるものにて、之が整肅は其發動に過ぎざるを以て、彼の技術儀制の如く、之を教習する方法無く、唯だ是等の常經を履んで長時日の間自然に第二の天性を涵養するの外あらざるものなり。(以下略す)

私は戦争に於て我が軍の強きも平素に於て軍の秩序を保つのも軍紀があるからであります、更に其の奥には軍紀を守る正義道德の精神即ち「誠」が萬邦無比の國體に生れたる我が國民に儼として充ち満ちて居るからと存じます。今日は昔と異り軍民一致に基く戦争であると存じます。私は常に斯く信じて居ります。神とは國民道德の萬人に優れて實行せられたる尊き方を指すものと考へて居ります。夫れ故に茲に軍紀の勅諭を掲げ奉り又秋山將軍の軍紀論を載せますのは畢竟獨り軍人に關してのみならず凡そ我が國民たるものは官吏たると政治家たると



教育家たると將又農工商業者たるとを問はず、衆庶と共に當に脊々服膺して實行し一に「誠」を以て神に近づかなければならぬと信じ、特に國民道德の基準たる「誠」を盡されんことを希望する趣旨に出でたるに外ならないのであります。

○ 滿洲國及支那に對する誠

廣袤八萬四千方里の大滿洲が日清、日露の戦役に次ぎ更に滿洲事變を経て曩に日本と不可分關係の獨立國を結成するに至り、而して其の發展振の飛躍的なることは世界に殆んど其の例を見ざるところにして實に驚異の外なく洵に欣快のことと申すべきであります。

滿洲は皇國の興廢を賭し十餘萬の生靈と巨億の國幣を犠牲として戦ひ來れるものにして實に日本の命脈であり東洋平和の爲であります。されば今や何んとしても是非とも守らなければならず又是非とも發展せしめなければならぬ重大使命であります。茲に於て皇軍、日系官吏及南滿洲鐵道會社等は一生懸命の努力を拂ひ匪賊と惡戦し嚴寒と苦闘し實に感謝に堪えざる活動振にして、今や第一期といふべき建設事業は略々成り次に第二期として治安、産業、金融、交通、通信、移民等専ら經濟開發に向つて力を致さんとするに至りましたことは共に慶ぶべきことであります。

大體滿洲は南は工業地帯として鐵あり石炭あり、北は農業地帯として大豆高粱等あり幾百千町歩の廣野は開墾に移民を迎へつゝあり資源豊富にして前途洋々たるものありと申すべく是等資源の開發及生産増進に就ては更に大計畫ありと聞き及んで居ります。

斯の如くにして滿洲國は王道樂土に成りつゝあります。併しながら更に翻つて四圍の狀勢及國內の全民意を察するに未だ以て晏如たる能はざるものあるは御推察の通りと存じます。周圍に就ては外國關係にして容易に意の如くならざる事情



あるも、同時に滿洲國は愈々以て民心を把握し朝野一心となり確固たる安全の基礎を固めざるべからずと存じます。是には砲火や権力のみにては永遠に安寧を確保し難きことは論なきところにして抑々政治の要諦としては一徳一心を根基とし今の少年を教育して軌道に就かしめ以て日本精神の眞髓と東洋平和の齋らす人類の幸福なる所以を心に刻み込ませざるべからずと信じます。而して此の任に當る教育者たるものは眞に「誠」を以て身自ら模範となり師道を盡さねばなりませぬと存じます。畢竟するに時の遅速こそあれ「誠」を以て歸服せしむることが國家永遠の根本策なりと信じます。

支那に於ても亦然りでありまして固より文武兩道を以て恩威並び行ふの必要なことは申すまでもありませぬが一方で叩いて他の一方で握手せんとしても無理であります。今日の支那は多年の教育の力に依り一變して居ります。宜しく見直すの必要ありと存じます。窮極する處は力のみならず、政治工作のみならず

況んや領土政策にあらずして支那人の本質に副ふ通商經濟政策に依り與へて取るの原則に基き支那人の利益をも謀り之を實現し以て我に信賴心服せしむるにあらざれば一方に刺戟を高め一方には依然として抗日とか親日とかを唱へ自分の生くるに都合のよき方に道具として空ら使ひするに過ぎず幾ら親日握手を勸むるも心からして我に向くにあらざれば變轉常なく何んの效果をも現はさずと存じます。英國の如きは利害の爲には随分殘虐無道を極めたる侵略國との批難はありますけれども一面には其の國民を馴致する爲に利益を與ふることに就いて容易ならざる苦心努力を拂ふたるものであります。

支那は世界の情勢及其の立場より見て利害上決して日本を根本的に敵とする事なき筈と信じますが歐米及ソ聯に我國の幾倍かの權益を與へながら獨り我が國のみを敵とし恨とするは何故でありませうか。支那の複雑なる深さを正しく認識し英國の如く克く政治と經濟と一致し、官も民も會社も商會も新聞も全く一體とな



りて參謀本部の姿を以て一定の國策に向つて活躍せるが如くありたく、然らざれば徒らに聲のみにして空念佛に終らざるか或は壓力を以てすれば其の結果如何は大いに深慮を要する處にして眞に共存共榮を目標とし市場の隆昌を期せんとするならば經濟的及文化的提携を根幹とし、之に對しては「誠」の一貫を以て臨むべきなりと信じます。假りに支那國內に事變ありとしても決して其の虚に乗ずるが如き舉に出でてはならぬと存じます。我に誠意の徹するあらば宣傳上手も敢て恐るゝに足らずと存じます。彼の聲丈けの恫喝外交の如きは徒らに相手方を興奮せしめ、周圍のものに不快の念を興へ不評判を招くに過ぎませぬ。外交はどうしても國民一致の支持あるものにあらざれば遠眼の利かない霞のやうな茫乎たる力弱き外交では不成功に終るものと思ひます。

要するに滿洲國は勿論支那に對しても共に永遠の提携、共榮には「誠」の本義に則り國民生活の安定を援助し以て相互の融和を圖るの外なく宜しく其の實を示す。

すべきなりと考へます。茲に始めて眞の東洋平和を實現し得るものと確信致します。

此の頃聞く處にてはソ聯は虚勢を張れるも實際は日本と戦ふの意思なしと、果して然らば是程結構なることはなく、此の兩者の對立が惱みの根源なるが故に若しも日、滿、ソ、支の協和就中ソ聯との平和協調が成立せば眞に東洋の平和幸福は實現すべく歐米何んすれど襲來の愚に出でんやであります。否歐米亦隨つて平和の心境に向ふこと、信じます。即ち四國の協和就中ソ聯との協和は獨り東亞のみならず實に世界平和の礎であります。果してソ聯の眞意如何。茲に於て伊藤公、桂公、後藤伯の如き方が出られ、以て此のソ聯との折衝の難局に當る能はざるか。又平素に於て名譽も金も求めない眞に赤誠報國の大乗的に立脚し國家の爲に身を投ずる人が指導者となり國策遂行の捨石となり、油となつて働く事實上の私設外交、國民外交、私設參謀となる補助機關が出現せないかと渴仰するのであ



ります。是れ畢竟彼をして我が國民性を知らしめ彼我の融合を助け以て國策遂行上偉大なる効果を齎らす方策なりと存じます。而して結局は人の問題であります。兵法に「戰勝は平和の原理より出で、軍の秩序は法規よりも正義の道德觀念に依りて維持せらる」と云はるゝ通り人間の支配せらるゝ究極は武力にあらず、金力にあらず、法律の力、權力、暴力にあらず全く道德の力にして道德は神意に副ふ天の道であり宇宙自然の法則であります。萬化の根元は和に在り「誠」に在りと信ずるのであります。

更に翻つて大觀するに「誠」も相手方に依つて用法を異にすべく、我が國民こそ世界第一の忠君愛國正義道德の國民であります。相手が愛國心もなく國家もなく、只自分の私腹を肥やすの外何物もなしとせば隨て人民の權利も存在せざるものといふべく、こんな政府を膺懲することは寧ろ彼の國民の幸福の結果となります。彼は只便宜上強きに附隨するに過ぎずとせば彼を威服する丈けの武力は

常に準備せざるべからずとの論も否定し難しと存じます。併し世間に傳へらるゝが如き準戰時の爲にあらずして畢竟之も眞正なる平和の榮光に浴せしめんとこの手段に外ならないのであります。以上は只其の根本義を説いた次第であります。

更に／＼大局よりすれば支那に對しては經濟問題よりも政治的解決が急務なりとの説が眞に近いかとも思はれます。又突發の事變の際は自ら別論たることも當然であります。願くは支那よ宜しく反省して東洋民族の姿に還り、同民族たる日本と相提携して東洋の文化と平和とを圖り以て東洋民族の福利安寧を保たんことを望んで止まない次第であります。

明治天皇の御製に

梓弓やしまのほかも波風の

静かなる世をわがいのるかな

以上斯く説くものゝ到底平和主義を以てしては彼支那を馴致し徳化し難く東洋平



和を奏功せざるものと認定したる場合更に進んで彼が不法行爲に出でたる場合は己むを得ず斷乎と所信に向つて非常手段に訴へ世界に我が眞意を闡明ならしむべく毫も躊躇するの必要なしと存じます。況んや支那が共產主義に轉化するに於てをやであります。併し日本は全國一致の意思に基くは勿論、徹頭徹尾正義の大旗たらざれば永遠に信義を世界に保ち日本精神に副ひ日本の繁榮を圖る能はずと確信するものであります。尤も正義を唱ふると同時に經濟觀念を忽にすべからざることは勿論であります。

元來外國に於て我が眞意を理解せざる所以のものは宣傳の方法拙劣にして外務當局は勿論、操觚の任に在るもの絶へず弛まず正義に向つて積極的攻勢を以て極力宣傳に努むべきなりと思ひます。將士の戰爭に於ける忠勇果敢なる奮闘に比すれば話にならぬ程勇氣の缺如たるものあるにあらずや。時に或る新聞雜誌が國內に於いて内輪同士に向ひ鋭鋒を以て攻撃するの勇氣を轉じて外國に向けたら如何

かと存じます。所謂内柔にして外剛ならんことを望みます。正義や道德は日本が本家なれば人類の幸福の爲に正々堂々と正義の大旗を翳して華々しき筆戰を向くるの大勇を揮ひたいものと存じます。何んぞ遲疑するの要あらんやであります。新聞でも外交でも餘りに日本人は遠慮勝の弊なきかと遺憾に堪へざる處であります。果して如何でありますか。尙平素に於て日本が如何に正義人道に厚きかを世界に周知せしむる必要ありと存じます。私は神勅、教育勅語、明治天皇の御製歌を外國に向つて大いに宣布普及せしむるならば、如何に日本が世界に秀でたる最高道德の國であるかを熟知せしめて、彼の事ある毎に日本を非人道的であるかの如き感を懐かしめざるに至るべしと存じます。尙故小泉八雲氏の著書の如き唯一の好適なる紹介と稱せられました。今は世人は如何取扱つて居るでござりませうか。其他茲に意を注ぐならば幾多の方法ありと存じます。

小泉八雲先生は本名をラフカデオ、ハーンといひ、父は英國人、母はギリシヤ



人にしてギリシヤに生れ、アイルランドにて育てられ長じてアメリカに遊び明治二十三年四月憧がれの日本に渡來し松江中學校、熊本第五高等學校、東京帝國大學に英語の教鞭を執り、遂に歸化して「八雲立つ出雲」に因み小泉八雲と改名せられたる篤學者なり。先生は深く日本の古風を慕ひて之を研究し日本の美はしき風物、日本の武士道精神を愛敬せられ、美文を以て日本の特に優秀なる美點を海外に紹介せられたる著書尠からず、就中「神國日本」「稻むらの火」は日本人特有の美はしき精神を力を籠めて書綴られたる名著にして、永く日本の感謝すべき恩人と謂ふべく、今や内外共に漸く之を忘れられんとするの時に當り大いに之を海外に利用宣傳し日本國民性が如何に正義人道を尊び犠牲心に富めるかを洽く平素に於て外國人に充分理解せしめ置くの必要ありと考へらる。然らば何んぞ支那人の逆宣傳に逢ひ後手式に辯解を是れ努むるの要あらんやと存ぜられます。

### ○ 聖徳太子の誠

國史を貫く日本精神の粹たり忠誠の華たる人として菅原道實、和氣清麿、楠正成等の諸公を推舉するは勿論なるも私の話が漸次國體のことにまで及ばんとするに當り先づ皇室の御出にして皇道文化の聖祖と仰ぐべく廣く全面的の文化施設に涉りて偉大なる功あり且つ内治外交に就て最も御苦心あらせられ又「誠」の圓滿なる聖者たる聖徳太子の御事を茲に一言申し上げたいと存じます。固より全班を申述べ盡すことは到底不可能であります。

抑々聖徳太子は日本文化の開祖と仰ぐべく實生活と信仰、教育と宗教、神道と儒教と佛教を渾然綜合歸一し且實踐せられたる御方でありまして、即ち思想に政治に法律に外交に藝術に建築に社會事業に殖産興業等凡ゆる方面に涉り、日本の平和と文化の發達とを圖るべく建國的努力を以て實行せられたる不世出の至聖で



あります。恐らく今日の日本文化発展の基を開く聖祖としては之を遠きに求めて太子に及ぶものなく、八面玲瓏圓滿無礙の徳の方であり「誠」の方であり後世に至る程益々輝き光つて參る所以であると存じます。大阪に於ける太子の功績は社會事業でありましたが、夫れが全國に擴大せらるゝに至りました。太子は日の出づる我國を背負つて日の没する大國と對立し、又内治上多年の情弊芟除に力を致され内治外交共に頗る御苦心あらせられた崇高なる御方でありまして決して佛法の開發者と云ふに止まりません。即ち内に多年蟠窟せる閥族を掃蕩し、外に朝鮮に於ける我國の勢力失墜を挽回すべく銳意力を傾倒されたことは割合に強く傳はつて居りませんけれども、是は實に容易ならざる二大功績であると存じます。

推古天皇の十二年に御公布相成りました、世に所謂聖徳太子十七憲法は徳治國其の儘の憲法にして、皇法の規模であり國體明徴の鐵塔であり庶政肅正の規範として有名なるものであります。先づ第一條には「和を以て貴しと爲す、忤ふこと

なきを宗とす」とありますが、和に就ては既に先刻より度々申上げて居る通り政治の倫理化であり治國の第一條件であります。次に第二條には「篤く三寶を敬せよ」とありますが、三寶とは佛、法、僧のことにして是は佛の三寶にあらずして國家の三寶を示されたるもの、即ち太子は宗教なる佛法の上に神祇を置かれて居り、單に宗教の佛を信ぜよとは示しになつては居りませぬ。國家の三寶を敬することが萬國の極宗即ち和の根源であると仰せられたのであると解して居ります。三寶は更に大きく言へば天地人を指したるものとも謂ふべく、又仁義禮智信の五常にも當り、歸するところ本體は日本精神を意味し自然の正法即ち「誠」即ち眞と實とを示されたものと存じます。我國の敬神崇祖は宗教の上に超然と立つて居るものと存じます。第四條には「其れ治民の本は要らず禮にあり」とありますが禮即ち「誠」であります。近頃は禮が亂るゝより自然に人心が弛緩し惡化するのではないかと考へられます。論語には「君臣を使ふに禮を以てす」とあり、



上を敬ひ下を恵み國家社會の公序良俗を確保するは禮道の眞諦であります。今や師父に對し上長に對し禮を缺くこと頗る多し、私は兵士が上官に對し面前は勿論背後に於てさへも敬禮を爲すを見て如何に精神的に尊きものがあるか、之が戰場に於ても大なる動きを爲すものでありまして即ち戰の場に立つも立たざるも道は一なりであります。太子が夙に人間と人間との平和調整を以て國民生活の大本とせられ、それは禮に始まるとせられたるは千古の卓見として敬服措かざるところであります。明治維新の大政治家は特に太子に崇拜歸依せられたそうでありませ。今や非常時に際し不出世の太子を想ふや洵に切なるものありと存じます。

特に申し上げたきことは歴代の天皇には其の御即位式に當り畏れ多くも御即位式の御召物と同一のものを御調製に相成り、其の都度京都太秦の廣隆寺に安置せらるゝ聖徳太子の御像に更衣御着せ付けに相成る御嘉例の一事を以て見ましても、如何に太子に對し皇室の御信仰深きかを拜察するに餘りありと存じます。尙

又 皇太后陛下には特に他に類のない御鄭重なる御態度を以てこの廣隆寺の太子様を御禮拜に相成つた趣を洩れ承つて居ります。以上を以て見ましても太子は終始「誠」の一貫したる徳の大聖で在らせられたことゝそゞろに感を深くする次第であります。

序ながら申し上げますが、太子は物部を御征伐になつても御自身の功となさらず四天王の御蔭なりとせられて四天王寺を献立せられたと申すことであります。彼の拔山蓋世の勇ある織田信長の如き豪宕なる傑人にしても常に功は部下に譲られ、又山岡鐵舟の如きは自分の功を語らず皆是他人の功業にして天の賜なりと申されて居ります。凡そ人に長たるものは萬事皆斯くの如きものかと深く思ひ當るものがあります。

### ○ 我國體より見たる國民の誠



國體とは其の國家の根本組織のことにして我が國體には

- 一、萬世一系の天皇之を統治させ給ふこと
- 二、臣民が赤誠を以て奉仕することに依つて皇運を無窮に興隆せしむること
- 三、此の國體は皇祖神に依て神ながらに定まれること

以上の如く我國體は皇祖皇宗の御血統を中心として存立し、神國、神孫、神民との三者に基く君民一體の大家族的道德組織が我國體の精華であるのであります。即ち多元國家にあらずして皇室と國家との一元國家であり、人爲國家ではなく自然國家と申すべく、無論外國の君民對立の抗爭的なるに比すべくもなきのみならず、皇室中心主義と申すよりも國自體が皇室中心であり之が絶對たることが萬邦無比と申すものであります。天皇が惠愛を以て公の御天職として萬民を統治させ給ふと同時に、我等國民は公に一切を捧げて奉仕の「誠」を盡すべきは實に此の神聖清明なる國體であるからであります。而して此の光輝ある國體に盡す國民の

「誠」は即ち日本精神、日本人の道なりと深く信じて居ります。

天皇は神なりとの信仰あれば日々の生活は自分の爲にあらず、人の爲、國の爲世の爲、天皇への御奉公、神への御奉仕となり、人々は皆大歡喜の中に世を暮らすこととなりませう。私はこの神國に於て今更國體明徴の問題を論ずるまでもなき筈と存じます。

近來歐米に於ては個人主義や自由主義の文明が行詰りとなつて、遂にファッシヨやナチスが現れ、國家社會至上主義とでも申しますか、稍々東洋式に似たところもありますが、併し國の成立の根本的に異なる我皇國のそれには到底及ばぬことと存じます。然るにファッシヨ政治を我國に移さんとする人ありとかの噂があるやうであります。之は權力國家でなく道德國家たる我が特異性の皇道政治に反するものと斷ぜざるを得ません。即ち國體明徴の趣旨に副はざるものであります。現にファッシヨの本家たるムッソリーニでさへファッシヨは外國に輸出する



ものにあらずと言ひ、又外國何れも獨裁の文字を用ふることを厭ふて居ります。更に茲に資本家ファツシヨなるものありとせば是亦大いに戒慎すべきものと存じます。ファツシヨ政治の主權者は常にスバイを放ち己れを批評する者は直ちに行衛不明たらしむる等常に晏如たる能はずして決して外觀に映ずるが如き靜肅なる統御が出来て居るものではないとの噂もあります、果して然らば是れ道德政治と根本を異にして居るからと存じます。

世には自由主義、個人主義、資本主義、統制主義、國家主義、帝國主義、共產主義、平等主義、社會主義、民主主義、享樂主義曰く何々主義と種々思想上にも經濟上にも對立的に夫々申しますけれども、我が神州に於ては萬古を通じて君は君たり、臣は臣たりと大義名分が明かに定つて居る自然國家であり、我等の生活は此の國家の中にあるが故に、只日本精神さへ確固不動に守りさへ居れば敢て何主義を立つるを要せずと存じます。國には夫れ／＼歴史沿革あり氣候風土の異

なるが如く、例へば彼の國の煉瓦造の家屋が必ずしも我が國に適するにあらず、米食を廢して肉食に變更する能はざるが如しでありまして、決して歐米に心酔すべからず又必ずしも之を排斥するにも及ばず自重自制して孰れにも極端に傾かず須らく中を執り而して其の自主獨立の大本たる重心に安立すべきものなりと存じます。石は石たり木は木たり電氣は電氣であつて、是等を合せて調和利用して最終の目的たる物を完成するのであります。故に何處までも自主本領は失はず彼此取捨して要は調節宜しきを得るに在り。之が即ち政治の要道であると存じます。徒らに血氣に躍る青年を煽動し又は調子に乗りて功を急ぎ榮譽に陶醉せしむるが如き、思想上言動上無責任にも安價の興奮を激成せしむることは危険にして深く猛省自重せざるべからずと考へます。日本の國家は家に擬する國家ではなく何處までも夫れ自體が萬邦に類のない自然の大なる家であるところの惟神の清明なる特殊の日本國家であることを忘れてはなりませぬ。



日本には儒教や佛教が入り來り、維新後にはキリスト教や、ギリシヤ風の文明が這入つて參りましたが、如何なる制度文物、如何なる科學宗教が入り來るとも、日本人は抱擁力があり選擇力があり、能く長を採り短を去りて之を咀嚼同化し共通點を效果的に利用し日本精神を中心として、之に右の外教を周圍の補修と爲し、更に超進力を以て日本的優良化する所に日本の確固たる特異の眞髓が存するのであります。例へば儒教を入れても變世革命主義は斷じて採らず、佛教を入れても平等無差別の虛無思想は採らず、國家鎮護、王法爲本の護國佛法となり、更に大乘教義を取りて皇國本位綜合文化の母系たる日本佛教となり、或は密教が入りても陰陽教は採らず、又歐米の説を入れても個人主義を排して民約憲法は採らず、欽定憲法となりて、縱令形は法治國たるも其の精神は古代其の儘の徳本にして、萬國無比、千古不磨の大典となれるが如しであります。即ち儒教も佛教もキリスト教も皆其の上に日本固有の隨神の教が乗り懸つて居ります。是れ我國には燦然

たる尊き力強き歴史の存するが爲にして、畢竟日本は惟神の國、至誠の一貫したる國であるからであります。

## 皇太后陛下の御歌に

異國のいかなる教入り來ても

とかすがやがて大御國振

とあります。皇威赫々國運隆々たること夫れ所以あるかなであります。

江戸後半期に涉り國學興り遂に皇政復古の維新氣運となりたることに就ては荷田春滿大人に感謝し敬意を表さねばなりません。大人は皇道古學を究むること深く之が門弟加茂眞淵に傳はり更に其の門弟本居宣長に傳はり尋いで平田篤胤に傳はりたるものにして、世に之を國學の四大人と稱せられて居ります。是等の大家に依り國學大いに振興し祖先の遺業を繼承し、日本精神を發揚し一定不變の國威を輝かすに大いに力ありたること、存じます。



前にも申述べました如く聖徳太子が佛法を輸入せらるゝ時にも、既に其の根基を確固と樹て日本固有の精神を以て日本佛法とせられて居ります。

工學博士佐藤定吉氏は熱心なる基督教信者であります。最近に至り私は眞の自分が何であるかを知らなかつたと同時に眞の皇國日本が何であるかをさへ知らなかつた。誠に恥かしい次第であつたとて、先づ日本人でありたい念願を「國體と宗教」といへる著書中に左の如く述べて居られます。

何よりも先づ私は眞の日本國民たり、眞の忠良なる臣民でありたいと念願する。何が何でも私たちは、祖國三千年の歴史を繼ぎ更に來らんとする世界的新時代に對して神の經綸の一端を後世に手渡さなければ、何の爲に日本人として生を享けて居るのか解らぬ。

基督者たることよりも、佛教徒たることよりも、先づ第一に皇國の一員たる道に生きたい。先づ第一に皇國が何であるか。畏れ多い事ながら、聖上陛下が神皇として如何に尊く在し給ふかを魂の奥底に徹せしめ、それから更めて新しい生命を伸ばして行きたい。我が日本民族の信仰は、外來の宗教を踏襲するのではなくして内部から我が民族の生命を伸展せしめ一切の障害物を打ち破つて進むことなのであつた。こゝに私たちの行く道がある。皇道精神から發足して世界最高の信仰の高峰によぢ登らんとする一本道こそ我が皇國と皇道の本領であり我が日本國民に命ぜられた天の道であることを知るのである。

「若し皇國と天皇との御爲たらんには、キリストより捨てらるゝもむしろ我が願ふ處なり」と皇國の絶對性が明白となつた。云々

蓋し基督に據る信念の力を以て尊皇愛國の「誠」を盡さんとする御趣旨と存じます。

佛子にして國士たり立正安國の主唱者たる日蓮聖人は「王佛一乘、世界統一」と疾呼し、殊に我々の敬服する弘道館記には「恭惟、上古神聖、立極垂統、照臨



六合、統御宇内、寶祚以之無窮、國體以之尊嚴」とありまして國體を簡明に説かれて居ります。外國には國體と云ふ文字さへも未だ無いさうであります。又惟神の國と申しても絶対に捕虜とならざる國民と申しても外國には其の意義が解せられぬ程でありませう。以て我國體の精華が、如何に日本獨特の光輝あるものであつて、忌はしき革命のあるやうな外國の例を以てしては到底同日に律すべきにあらざるかを知るべきであります。況んや近代文明は殆んど歐米に比し遜色なきまでに進歩せるに於てをやでありまして茲に益々日本精神の下に科學の進歩を圖り物心一如の進展發達を期待して止まざるところであります。

我が日本は皇統連綿たる萬世一系の天皇を中心とする尊嚴冒すべからざる國體であつて、天皇は人神であり御慈悲深く而も御威嚴高くあらせられ所謂「義は君臣、情は父子」と謂ふべき一君萬民の美はしき世界無比の國であり、上下一貫せる敬神崇祖―忠孝―「誠」の大義に依り祭政一致の精神を以て國政の進暢を謀るべく立つて居る他に眞似の出来ない幸福なる獨特の國柄であります。我が國は天然資源に乏しきも誇るべき國民精神には正に大々的に富めりと謂ふべしであります。

## 明治天皇の御製に

とこしへに民安かれと祈るなる

我が世をまもれ伊勢のおほかみ

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

わが民草の上はいかにと

いかに以て敬神崇祖の御念が厚く又民を愛しさせ給ふ御深慮の程も洵に有り難く拜察致されます。國民亦敬神崇祖の信念より忠孝を發し義勇尙武となり而して平生は平和の美德を愛する國民であります。神は人の敬に依りて威を増し、人は神の徳に依りて運を添ふ。



世の中に神の道とて道あらば

人の外なる人や學ばん

此の頃喧しき國體明徴は申すまでもありませんが、既に明治元年九月十六日の仰出に國體を辨じとあり又明治二年二月五日諸府縣に施政順序が仰出されたる時、重要事項として「小學校を設くること」とありて其の説明として「國體時勢を辨へ忠孝の道を知るべき様訓諭すべし」とあり、即ち明治初年に於て右の如く畏くも夙に國體明徴の御趣旨を御示しに相成つて居りまして七十年の後の今日に至り彼是事新しく論ずる迄もありません。學者の天皇機關説が三十年來幾千幾萬の學徒に教へられ來つて居つても、我國體に關する國民全般の根本信念は、儼乎として微動だも致しませぬのは仰々何んの證左でありませうか。外國文明を輸入しても基礎眞髓の動かざる例は、恰も果實が接木に依りて良果を生ずることあるも、其の接木の根基となる眞髓の變らざるが如く其の血の流は實に偉大なる不變

の力があるのであります。而も其の眞髓には皇道精神の象徴たる三種の神器の徳即ち智仁勇の皇化が根強く洽く潤つて居るものと存じます。

皇道は大衆の徳を以て治めせしめられ、霸道の如く力を以て治むるものとは全然異なつて居ります。何んと申しても日本は個人を主とする國家社會と異なり億兆心を一にし咸其の徳を一にせんとする皇室を宗家とする一大家族團體の徳治國であります。即ち日本は上に萬世一系の皇室を戴き、其の眞髓なり「誠」なりの精神が一貫して脈々と流れて居るものであります。我國には遠く天祖より儼乎たる神勅を下し賜ひしことは申すに及ばず日本人は、祖宗より受けたる遺訓精神を奉じて未だ曾て中斷せず變化せず、其の儘生活原理として繼承して來て居ります。日本國民は此の意義を以て生活し生存し、郷土愛となり祖國愛となり、又家族觀念を持し至誠奉公以て皇猷を扶翼し奉り國家を擁護して居るものであります。日本は曾て外國と戰つて負けたりたことのない國でありまして他に例のない國で



あります。之れは大義名分に反して戦うたることなく神の道即ち日本人の道を守り思想國防の確固不拔のものが存するが故であります。

君民一體、忠孝一致、徳治の温乎たる國容は是れ即ち我國の萬邦に冠たる所以にして牢固として動かざること山の如し、彼の國民の都合上にてカイゼルを廢したる國家とは截然として比較にはなりません。國家學者のスタイン博士も「世界中理想の國家は唯日本あるのみ」と激賞して居らるゝ通り日本の國家は至上にして外國の國家と淵源實質に於て雲泥の差異があります。日本は金匱無缺の國家であります。天上に神ましまし、地に天皇まします。天皇は現神人であります。されば皇室を中心としたる君民一體の皇國たることは毫も議論を挾むの餘地なく超然統一せられて居る國であります。縦令平素に於て死の道を學ぶ者と、生の道を講ずるものと時に或は氷炭相容れざるが如き觀を呈することありとしても、一朝事あれば日の丸の御旗の下に渾然として上下一心同體となり、宮城の前に伏し拜み

ては心田から眞清水が湧き出づる如く敬虔感激の涙を滂ぼし、紙幣が不兌換となつても、菊の御紋章には絶對信賴して居る國民であります。是は宇内萬邦に匹儔なき處にして一には一血統一人種の集合體であるといふ關係もありませう。尤も時に異人種の混入ありしも我國は古來抱擁心の仁徳を以て純日本的に順化せしめられて居ります。彼の何か國に事あるときに乘じて乖離する國民と、事あれば益益一致する我國民とは徳治の根本に於て大なる差異あるところにして亦實に往古より先天的に靈妙不可思議の血性を受け繼いだ特異獨歩の誇りとすべき國民であるが爲と存じます。外國が日本を恐るゝ唯一のものは獨り日本精神に對してのみであります。露國のクロバトキンは日本に來朝して國情を觀察したるも獨り日本精神を研究することを忘れたりとて後悔せりとのことであります。大津事變の際露國にては直に武力を以て日本を撃滅すべしとの説が多かりしが、露帝は日本に大和魂の旺盛なる間は容易に手を出すべからずとて制止せられたとのことであり



ます。如何に以て大和魂の尊きかを知るに足ると存じます。若し強いて我國民性の缺點を擧ぐれば、經濟思想の缺けて居つたことかと存じますが、夫れも近年著しく發展し、殊に他に頼らず漸く獨立的に進んで來たことは最も喜ばしき傾向と存じて居ります。而して近來我商品の外國に躍進するに至りたるは、技術の進歩は勿論又爲替相場の關係もあります。けれども、一には我商人の自覺に依り從來批難されたる商品の見本と相違せる粗製品又は取引上の不信用を恢復し大いに信用の増進したる結果なりと存じます。尙茲に最も慎むべきことは商賣上の同士討のことであります。是は結局内外に迷惑を蒙らしめ終には自分も亦窮境に陥るものでありますから政府の統制を待たず大乘の見地に立脚して同業者間自ら進んで能く統制を保ちたいものであります。

前にも申しました通り武士道は即ち實業道にして商業は正道の上に立ちて有無相通じ、信用を以て利益を得るものなれば、どうぞ此の上は信用を第一とし歩調

を合せて廣く世界に向つて邁進すべく、殊に商工都市の心臓たる我大阪の如きは元來上方文化として空を排し實を求むる自由獨立の處なれば其の本義の利害上よりしても大我の利を利として今一段と道徳心と社會奉仕觀念とを進め、以て海陸四通の我國唯一の大商工都市として愈々高く愈々深く名實共に美はしく備はり雄然重きを爲すに至りたいものと念じて居ります。動もすれば東京は政治の都として精神的なりと稱し、大阪は自己中心主義或は物質主義の集合體かの如く解せられたる時代もありましたが、由來大阪は何事も實に即して考ふるが故に比較的堅實にして殊に今日の大阪は最早昔日の大阪にあらず、物質的の上に精神的を加へ更に清く直く「誠」を此の大阪の實業界よりして率先實行して之を天下に呼號せなければなりませぬ。是れ即ち一は大大阪の品位を高め、一は明朗潑刺たる大大阪たらしめ、以て「誠」に對する範を全國に示すものにして之には大阪を以てすることが最も有效且捷徑なりとしてお互に心強く又欣快のこと、存じます。更



に多きを求めれば大國策として「誠」を基調とし國を擧げて共に俱に對外大經濟策を講じたいものと存じます。決して一大阪といふが如き小なる利害に囚はるゝ意味ではありません。

大阪は維新後打撃を受けて一時衰微に傾きましたが、それが今日の如き隆昌の域に恢復せしは何等政府の力を頼まず全く獨立獨行と奮闘努力の結果であります。こゝに大阪魂の自主精神の躍如たるものがあると思存します。この大阪魂を大いに廣く揮いたいものと冀ふのであります。古來大阪は利子を以て元金を償却し、東京は利子は餘分のものとして使用したと言はれて居ります。夫れ丈け大阪は地味にして獨立的堅固なる素質を持つて居る所であります。決して上方贅六ではありません。今日大阪は外觀内容共に日本の代表的商工都市であり學術及機械の應用振は昔日と異なり其新進氣鋭の勢力を以て縱横に發展するの狀眞に見直すべきであつて工業の生産額は遙かに東京を凌駕して居ります。茲に於て益々人的

の向上を必要とし夫には「誠」の實行が根基であると唱ふる次第であります。

外國を我領土同様に化せしむるには必ずしも武力を用ゐずとも英米の如く他に平和的國策遂行の道もあることゝ存じます。即ち平時に於ては商工戰であります。それには焦らず靜かに漸を追ふて撓まず倦まず正道を以て大策を講ぜねばなりません。元來獨り商業上のみならず我國の内政外交共に目前の功を收めんとせず自己本位の小策を捨て自分を大衆の中に入れて廣く社會に寄與するの大精神を以て、信義を推し立て互助の精神を以て進むことが終局に於ける自他共同の勝利なりと考へます。信義は家産の最も堅固なる柱であり國の礎であります。所謂「信は萬事の本」にして「信を失へば即ち立たず」であります。極言すれば信義なきものは禽獸と何ぞ擇ばんやであります。信即ち「誠」であり「誠」は最上の道徳であります。眞の「誠」は清く明かるく直きものにして畢竟敬、愛、信の三相の作用に歸着するものと存じます。大和民族の世界に躍進する根基は一に「誠」に



在りと信じます。

文武天皇の詔勅に

國民道德の根本は明く淨く直き「誠」の心を以て仕ふべし  
と仰せられて御座います。

彼の教育勅語は、固より教育者に對してのみにあらず、汎く一般臣民に對し、建國の大精神と國民道德の大本を御示しになつた一大聖典でありますから、單に之を學校で教師や學生が儀式的に奉讀するに止めず、億兆齊しく仰ぐ一國一家の君、忠孝一心、父子一體の大精神を奉體し且夕之を躬行しなければならぬこと、存じます。若し銀行、會社、商店乃至家庭に於て毎日教育勅語を奉讀すること、しましたならば其の効果は實に偉大なるものと存じます。或は毎朝ラヂオに於て一定の時間に謹みて奉讀し以て億兆共に脊々服膺實行に力むることも亦一方法と存じます。私は今年郷里や現任の小學校の兒童數千人に「教育勅語のお話」の冊

子を配付致しましたが、これも兒童を通じて父兄に勅語の御聖旨を實行して頂きたい本意に外ならないからであります。

日本國民は 陛下の赤子であることの一事に至つては、恐らく何人も異論なきところにして今更申すに及ばずと存じます。

明治天皇の明治元年三月の御宸翰に

天下億兆、一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば今日の事、朕自身骨を  
勞し心志を苦しめ、艱難の先に立ち古烈聖盡させ給ひし蹤を履み、治績を勤  
めてこそ始めて天職を奉じて、億兆の君たる所に背かざるべし。

との詔は正しく大御心の發露として皇國政治の大本を御示しに相成つて居るのであります。更に

明治天皇の御製に

罪あらばわれを咎めよ天津神



民はわが身の生みし子なれば

と此の大御心を以て常に萬民に臨ませられ給ふたのであります。

今上天皇陛下御即位式の勅語に

皇祖皇宗國を建て民に臨むや、國を以て家と爲し、民を視ること子の如し、烈聖相承けて仁恕の化下に洽く兆民相率ゐて敬忠の俗上に奉じ、上下感孚し、君民體を一にす。是れ我が國體の精華にして當に天地と並び存するところなり。

と、即ち日本國體の根本を御垂示になつたもので更に「國を以て家と爲し、民を視ること子の如し」と仰せられて居ります。かやうな臣民を撫育し給ふ大愛に富める國柄が世界中何處を捜してありませうか。斯る仁慈の君主を戴く國は唯夫れ一に我日本あるのみであります。三千年の有難き歴史を有しこの幸福の國に生れたるものにして、御歴代の天皇の御稜威御聖徳に對し天下萬民何人も感激せざる

ものあらんやであります。茲に我々國民は大義名分を謬らず、所謂億兆心を一にし至誠を以て天壤無窮の皇運を扶翼し奉るの外はありません。斯かる至誠の一貫したる類のない至高至大なる日本人の意氣精神は世界何人と雖奪ふことの出来ない尊きものであります。

明治天皇の御製に

國民の力のかぎりつくすこそ

わが日の本のかためなりけり

「誠」は善の首徳にして人心の根本でありますから、前にも申述べた如く特に學校教育、家庭教育、社會教育に於て萬民協力し日本の爲に至誠を實にせんことを望んで止まない所であります。

附け加へて申し上げますが、新聞は社會の木鐸にして國家國民の公益を謀り、國民の嚮ふ方針を示唆し、文化の開發教化の指導上に偉大なる力を有するものなれ



ば、全國の新聞が常に讀者の求むる興味に迎合する營業政策のみに馳せず指導精神を以て所謂三面記事の欄を割愛して毎日必ず「教育」の欄を設け教育に關する論説は勿論、例へば信州伊那郡の農學校の勤勞教育振り或は農村の勞働振り若くは自治獨立の實狀なり、岩手縣、滋賀縣、愛媛縣其他各府縣農村の模範的勞働更生振りなり、更に獨逸又は丁抹及瑞西の徹底せる勤勞振の實況等を掲げ或は内外個人の善行美風を推奨する等各方面よりして熱心に社會善導に力を注がるゝならば、自然通俗的の間に人の人たる根本精神の培養及社會人心の刷新上大なる寄與貢獻なりと考へて居ります。又雜誌其の他の刊行物の取締は勿論、彼の映畫の取締乃至通俗教育上進んで映畫を振興せしむることは今日に處して最も力を盡すべき緊要事なりと存じます。又ラヂオにて公德講座、常識講座、感謝講座、反省講座を設け大衆に向つて日々放送せらるゝならば大なる效果あるべしと存じます。其の他手近かなる實際に即して廣く改善指導すべき方法多々ありと存じます。敢て其

の筋の活動を望んで止まざる次第であります。

### ○結

### 論

要するに我人共に眞に「誠」の道に向つて毅然として邁進し、之を活社會に骨となり血となりて化育活動せしめ大いに日本精神を發揮し教育勅語の聖旨を奉體實行するならば、こゝに人心の安定を得て平和の基礎を造り、訴訟司獄等の司法事務は僅少となり、行政上の無駄は申すまでもなく大いに省き得られ、自然陸海軍の費用も減ずるに至りませうし、積極的には商業は繁昌となり、産業は振興し、歳出は減少して反對に歳入は大いに増加し、赤字公債克服の如きも問題でないと存じます。こゝに國民の生活も安定し、人文は正しく進展し、天下は泰平となり、國家の隆昌期して待つべきなりと信じます。而して此の「誠」は獨り我邦のみならず、更に之を萬邦に及ぼすならば、軍縮會議も、世界經濟會議も圓滿に解



決し、國際聯盟も凡ゆる國際會議も信義權威を保ち、世界平和は完全に成立し、如何に天地が明朗化し、如何に世界が美化することとなり、如何に人類が幸福に浴することでありませうか。私は理想として眞善眞美の萬國共榮の康寧和樂の世界を冀ふものであります。縱令先進國と雖、口先のみ世界の平和の美名を假用し其の實、自國功利本位のみ偏重して他國は軍縮せよ我は優越の軍備を保たんとして譲らず、正義人道に反し自我々々へと進み毫も自ら反省することなく、又經濟上には曾て自由通商を看板として日本を開發したりと誇る先進國が今は需要供給有無相通の原理に逆行し、水は高きより低きに向つて流るゝの自然の大原則を外れ、品質の良否價格の高低を無視し、關稅を高くし又は輸入制限を設けて自由通商を妨げ中正の大本に逆行し、産業の發達を阻害し、或は人種別を口實として移民を阻止し、不平等を維れ事とし、隣保相愛の實なく加ふるに資源の偏傾不均衡を固持して世界人類の生存に脅威を與へて不安ならしめ、共存共榮は名のみ

にして眞に世界人類の幸福、安寧秩序が保たれないとすれば、獨逸の哲人シペングラの豫言せる如く、「近代西洋文明は崩壞して再び原始的生活に復歸するも時の問題なり」と言へるは必ずしも夢想でないと思へます。現にハロルド、ベグビ―は歐洲大戰を豫言し之が適中したる先例もあります。各國にして今日の如き考へを改めざる以上は世界は波高く決して枕を高くして眠る時は參りませぬ。聞く處に依れば眞の平和の年は十四年の内一年の割合との趣であります。併し何んと申しても正しき國家が隆興し正しき個人が發展するのは天の理法であります。即ち天地の公道、宇宙の眞理に基くの外ありません。今度英國の總理大臣となりましたポールドウインは、一昨年あたりに「歐洲大陸は全るで瘋癲病院のやうなものである」と言つて居つた通り、少しく離れて英國より冷然として之を見れば、左様な感じをなすのも當然でありませうが、其の英國自身も亦正常とは誰が斷言し得ませうか。之は獨り大陸のみの問題ではなく果して今後の世界の風雲が如何



に推移しませうか。古諺に「天は復へすを好む」と云へることがあります。これは白色人種とか有色人種とかの問題にあらずして實に人間の重大問題であり自然循環の原理であります。

道は一にして中外の別なく、猶日月は天下の日月にして一國の専有すべきものにあらずと云へるが如しであります。「誠」は古今東西を通じて人間の基礎にして實に宇宙の眞理であります。元來日本精神は獨り日本のみに限ると云ふが如き小なるものではありません。況んや今日の日本は日本の日本にあらず世界の日本でありとすれば、宜しく先づ我神州よりして世界萬邦に向つて正義の下に大いに皇道精神を鼓吹宣揚し、恰く「誠」宗の信者たらしむべく指導感化すべきであると存じます。但し浮薄なる自負心や空元氣は禁物であり沈着慎重を要するは勿論であります。殊に外國に對し皇威を示すには内に協力一致の實を以てせざるべからざることは是亦當然でありまして、萬物は天地の和合に依つて化育することは

自然の理法であります。こゝに大局に立脚して大國民の實質を充さんことを要望する所以であります。元來日本の智は廣くして徳を含み、西洋の智は狭くして徳を含みませぬ。若し學びを進め智を磨きても情を鍛へざるときは人間が分裂して片輪ものとなります。今日は智ありて慧なく情なく四海兄弟の實何處にありやと問ひたいのであります。

誠ほど世に有がたき事はなし

#### 誠一つで四海兄弟

どうも日本の「誠」は心より發し西洋の「誠」は打算より來るもの多きが如し、歐米人は日本の民族性を理解せず、東亞といへば支那人と同一視し、又總ての判斷は自國の利害より出發するが故に日本人の解するが如き道義をば無視する場合ありて「誠」に反し國際正義に悖ること多しと存じます。この點よりして觀れば何んぞ歐米が先進國たる價値を有しませうか。若しも打算が人間の本能なりと言



はゞ又更に何をか言はんやであります。

國家は最高の道徳的存在なりと申しますが、若しも世界の何れの國にても「誠」に反し、道徳に背き國際信義を無視し、譎詐欺瞞巧辭を弄し功利搾取略奪を事とするものあらば、共存共榮の本義に反し相互分裂破壊して所謂自ら天に向つて唾するものと謂ふべく、天は此の「誠」なく宇宙の眞理に背くものは只惟れ亡ぼさんのみ、是れ自然の理法であります。孟子の謂ゆる「天に順ふものは存し天に逆ふものは亡ぶ」であります。世界各國の歴史は明らかに之を教へて居るのではありませぬか。「歴史は繰返す」と申しますが若し之を忘るゝときは世界は没落道に墜落して仕舞ひます。茲に於て「誠」の上より觀れば鬭争の世界に超脱し宇宙の眞理を繼承せる皇道を中外に闡明し世界を一家として道義の世に統一し巍然と宇内一界に卓立して君臨します方は唯夫れ我日本の 天皇陛下の外に之なしと信じます。之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず天地の大道に一

致したるものは獨り我日本國のみと考へます。

伊弉諾尊、伊弉冉尊、共に議りて曰く、我れ己に大八洲國及山川草木を生めり、何ぞ天下の主たる者を生まざらむやと。是に共に日神を生み玉へり、日神は即ち天照大神にして天津日嗣の天皇にあらせられ、又大八洲國は世界全體なれば、天皇は全世界の天皇と申すべきと存じます。明治天皇は維新の詔勅に於て八紘一宇の理想を明示し給ふて在らせられます。是は建國以來皇祖皇宗の大御心と申すべくこの偉業を恢弘することは即ち皇徳四海に光被せんとする有難き御趣旨と伺はれます。即ち世界を正義正道に導き世界の人類を幸福に誘ふものは日本であらねばなりません。東海、國あり、大日本といふ。旭日先づ東より出でて球上第一の靈國を照らす、偉なる哉、大なる哉、日出づるの國。彼の陽に平和を唱ふるも、陰に銃を列べ劍を磨いて切々相迫るの心底は、天知る人知る吾知ると謂ふべきであります。隠すより顯はるゝはなし、畢竟人は落つる處に落ち、善因善



果、惡因惡果は來たる時に來たるものなりとは一點の疑はありません。「萬の徳には自然の酬あり、萬の惡には自然の罰あり」皆様如何でありませうか、紛々擾々斯の如き情勢にして列國は何時同じませうか、何時和しませうか、經濟的武裝は何時撤廢せらるゝでありませうか、此の世は白人の世界ではありません。萬邦無比を誇る我國の民族が世界人類の幸福の爲に進んで取るべき拔本塞源の大策如何。私は世界各國の高等教育に於て國際道義の講座を盛んに設置せんことを切望するものであります。同時に日本も我が民族精神及地位を世界に充分知らしむることに努力せなければなりませんことは勿論であります。

嗟、世界を左右する英米の二大國よ、世界の富の二分の一を有しながら國なきユダヤ人種は暫く別として眞に世界平和、國際道義の爲に宜しく假面を脱ぎ、詭辯を去り、心を洗ひ、須らく正義人道の上に立つべきなりと露骨に高く叫びたいのであります。殊に英國民は個人としては世界一の品位高く常識に富める立派な

る好紳士でありますけれども、一度び國際問題に移らんか、國を擧げて不言の裡に着々自國功利本位の劃策を進行し、加之背後の魔物と稱せらるゝ如く狼心羊皮の妙術を揮ひ第三國の蔭に潜みて巧に之を操縦する等其の老獪なること洵に油斷ならざる恐るべき國民にして惜い哉此の點は日本精神のみならず世界精神とも相反し甚だ心服し難き處にして英國は勿論世界正義の爲に最も遺憾とする處であります。或る意味より見て世界の文明及平和を増進するものは英國にして、又世界の文明及平和を阻止するものも亦英國なりと言はれて居ります。夫れは餘りにも自國功利の擁護の奸才狡智に長ずるからでありませう。果して之が何時まで持續するでありませうか。抑々何んの爲に軍擴に汲々たるでありませうか。一に打算のみではありませんか。是が世界の平和を招來しませうか。若しも大國にして心からして友誼的であり又覇者たらず王者の心ありとせば世界は擧げて立どころに樂土と化せんこと必せりであります。但し彼の靜中の動は兎角我等動中の空動に



陥り易きもの、採つて以て大いに戒鑑となすべき點なりと存じます。又米國は英國の如く打算に走るにあらず、時に利害をも捨て、人道の感情に熱する國民であります。併し其の米國と雖世界平和を唱へ、軍縮を口にするも其の實、軍國主義に進みつゝあり、實際の行動は果して平和の女神の御心に副ふや頗る疑あり。況んや露骨なるソヴェイエツト聯邦に於てをやであります。そこで已むなく國防強化論が起らざるを得ないのであります。故に國內の治安統一は無論であります。一方外國の情勢を取り入れて考へざるべからざることも亦勿論であります。但し終局の目的は國民生活の安定を期するに外ならざる次第にして、將來の安否は畢竟國民の決意如何に存することであります。而して人も我も大局に立ちて共に慎み共に考ふべきことであり結局は「誠」如何に歸着致します。

明治天皇の御製に

よもの海みなはらからと思ふ世に

など波風のたちさわぐらむ

私は全國の國民一同が毎朝合掌謹拜し、或は神前に「誠」を祈願し、或は店頭又は居間其の他隨處に常に「誠」なる文字を掲げて、之に違背せざるやうに念とすることは無論必要であり、又禮即ち「誠」であるとは存じますが、併し「誠」なるものは、唯表面だけの形の上に過ぎずして其の精神の實が現はれなければ固より未だ以て眞の根柢に觸れたものとは言へないのみならず、甚だ力弱きものであります。「事に即して眞」と云ふことがありますが先づ幽顯を全觀し、自己を全觀し、我を知り止まるを知り足るを知り、己れに打ち克ちて私を去り、晝夜の別なく行住坐臥悉く事に即して「誠」が琴線に觸れ熱となりて現はれ、其の姿は恰も富士山の如く「晴れてよし曇りてもよし富士の山もとの姿はかわらざりけり」と云へる通り何時何れの視角より見ても、常に同一にして正しく而も秀麗の實あり、而して其の至誠が所謂天に通ずるものでなければならぬと存じます。再び申



上げますが

明治天皇の御製に

目に見えぬ神の心に通ふこそ

人の心の誠なりけれ

即ち至誠通神を仰せられて居ります。運は天よりも降れば地よりも湧きます。併し蒔かぬ種は生えませぬ。自分の腕で取るのであります。即ち禍福は天にあらざ地にあらざ自ら招くのであります。神は自らを助け自らを守るものを守つて下さるものでありまして、自らを守らざるものは神も亦守つて下さらぬものであります。彼の天祐神助は至誠より生れ至誠より授かる賜であります。

「誠」は天の道なり。之を「誠」にするは人の道なり。即ち人は努力に依つて「誠」の道を行ひ天の道に近づくの謂にして、之が人間本來の性であり行くべき道であり任務である。是れ人間の至高至大なる處にして禽獸と異なる所以であり

ます。されば人として「誠」の外に道なく性なく徳なし。此の天意使命に背くものは必ず天罰神罰を免れざるものであります。彼の「俯仰天地に愧ぢず」と威張つて見ても、眞の「誠」の實がなければ何んの役にも立ちません。又「千萬人と雖吾往かん」の壯語も「誠」なる信念あつての勇氣であります。自尊心も「誠」あつて始めて光るのであります。彼の精神作興と謂ひ質實剛健と謂ふも亦皆「誠」より生るゝものであります。其の「誠」とは第一に私心を去ることであります。私心を去れば則ち正しく明るい眞心となり努力躍進することになります。没我の心境に入れば安心が出来て感謝の念を生じ歡喜となり永遠の希望に満ち前途洋々として眞に明るき「誠」の心となります。されば「誠」は人を動かし鬼神を泣かしめ金石を透し天地をも貫きます。一個人と云はず、一國と云はず、世界萬國と云はず、古今を通じて文に武に、一として「誠」の離るべからざることは如上繰り返して申述べた通りでありまして、政府者は勿論政治家も法律家も實業家も教育



家も宗教家も將又社會事業家も一齊に擧つて共に道の上に立ち眞に「誠」より溢れ出でたる力強き道德生活に生きて業を勵まんことを熱望して止まざる處であります。茲に國民全般の心の建て直しが出來文武一體祭政一致以て堅實平和なる國家の隆昌を期し得ることゝ信じます。此の頃祭政一致と申せば神主が唱ふることかと輕視する人もありませうが政治の根本要道は實に茲に在るのであります。決して古典學を説くのではありません。天地神明に誓ひて明るき政治を爲すのであつて上下融合の一致點に達するのであるから元眞の祭と政とは一致のものと申して政治が現實に權威あるのであります。然るに之を輕視するから思想が紊れ、人心定らず、政治が確立せざるのであります。どうか此の根本精神は正しく強く不動でありたいものと存じます。庶政一新固より必要でありますが、人心一新は更に先行的に緊要なりと存じます。何んとなれば外面的よりも内面的の方が根本であり中心であるからであります。要するに萬事人に在り一國萬民の心の一體であ

るや否やが第一の實際問題であります。上に立つものは宜しく國民を指導感化すべく身を以て範を示し治國の大本たる道義の觀念に向つて第一に強く熱心に唱道示唆し洽く民心に深く刻み込むべきであると考へます。此の徹底が政治の要道であります。

明治天皇は明治三年正月御詔勅を下し給ひ「天照皇大神の神勅に添ひ祭政一致の旨を體し神明を敬し惟神の大道を遵奉すべきことゝ人心の嚮ふところを御示しに相成つて居ります。然るに今や上下共にこの點が兎角不徹底にして吾人の甚だ遺憾に堪えざる處であります。私は繰返して申します。倫理化なくして何んの政道が立ちませうか。斯くて畏くも 明治天皇は一人にても職を得ざるものあらば皆朕が罪なりと仰せられたる聖旨に副ひ奉ることが出來ませうか。宜しく改善を外に求めず先づ内に求むべきであります。若しも外形にのみ意を注ぐならば其效少くして依然相變らず舊大臣や政黨の領袖連が續々囹圄の人となるの醜を免れざ



るべく如何にして國民を感化し得べきでありませうか。今日は果して朝野を通じて和が結ばれ國是が一貫し人心の統制が行はれて居りませうか。私は決して政治を批難するにあらずして事實を述ぶるのであります。

以上私が多岐に涉つて長々と申述べましたのも、畢竟人間の第一義は「誠」にして如何に知識及物質の文明が進歩發達しましても人として「誠」を離れては生くるものではありません。「誠」は凡ゆる人事問題の鍵であり、終始現實に息の通つた活きた「誠」が必要です。今日實際世人が餘りにも人格を目標とせず心の修養を第二とし、専ら唯金唯物に走り虚榮に迷ひ輕佻以て身を誤り世を毒することの多きを憂ひ、此の時弊に對し殊に實業界に向つて「誠」の力と誠の活動とを叫んだ次第であります。而して是れ實に私の不動の信仰であります。

我國に於ては、日本精神「誠」を以て肇國以來未だ曾て渝ゆることなき國體の精華を尊重し、舉國一致至誠を堅持し、澎湃たる興國の意氣を以て不動の國是に向つて日々新たに邁進し、恒久の平和と國利民福とを圖り、以て春風駘蕩櫻の日本の隆々と彌榮えに榮えんことを皆様と共に謹みて祈願して止まざる處であります。

本年は恰も大楠公殉節六百年、又二宮尊徳先生の八十年の記念の年に當り、偶々此の「誠」に就てお話を致しましたことは、衷心窃かに喜びと致す處であります。私が本年さゝやかでありますが大楠公の銅像を、某々二小學校の校庭に建設することとなり、其の他小學教育獎勵事業に聊か寄與せることも、畢竟昨年四月賜はりました勅語に「國民道德を振作し以て國運の隆盛を致すは其の淵源するところ實に小學教育にあり」と仰せられました通り、國民教育の基調は小學教育に在りとの考よりして、深く期するところがある次第であります。

如上私が敢て大膽を顧みず直言する所以のものは熟々世上實際の出來事の由つて來るところを探究するに、事大小となく必ず各方面に於て多少とも夫々「徳」



を缺き「誠」を缺きて天意に背反し、不純なる無理が存することを痛感するからであります。故に上下貴賤貧富の別なく文武百官政黨有産階級有識者其の他衆庶に至るまで共々に、道義立國の大精神に基き全幅の「誠」を捧げ、常に自己を深く反省して先づ己を直ふし、中正を執りて矯激を戒め、軌道を履みて秩序を重んじ、緩急宜しきを得て時の大勢に順應すると共に本末を誤らず、常時教育勸語を奉體して國憲を重んじ義務に従ひ、國防を忽にせざると同時に生業に培ひ各其の分を守りて相犯さず、文武一途、責任を重んじ、業を勵み浮華を戒め質實を尊び、私心を挾まらず公益を圖り、小異を棄て、大同に就き、正義公道に基きて謙讓以て己を律し、渾然たる融合疏通を謀りて克く和衷協同し、一徳一心眞に億兆心を一にして國家の隆昌國民生活の安定に盡すを以て刻下の急務なりと信ずるものであります。殊に現今非常時に處するの要諦は萬民和合し協力一致して一貫したる「誠」を根基とし、渾身の心、渾身の力を以て不動の國策を内外に向つて熟慮

斷行するの外何物もなしと確信し、茲に強く至誠を高唱する所以であります。

「誠」は天の道にして天の道を日常に即して實行せんとするものであります。是れ實に人として將又國家社會として萬古不易の礎石であります。「誠」あれば則ち和自ら成る。和は天下の達道にして萬化の根元であります。天の利も地の利も人の和に如かず。月は高くして下らず、水は低くして上らざるも、人は水月相通ずるの心境なかるべからず。況んや非常時に於て縱令軍備あり勇氣ありと雖、人の和なくんば終に勝てず、上下の一致和合こそ眞に最上の武器なりと信ずるものであります。只時の當路者は此の趣旨精神の下に如何なる手段方策を施して克く其の實を擧ぐるか、問題であります。官僚とか政黨とかに基礎を置かんよりも先づ「誠」に基礎を置き終始一貫することは第一の必須條件であると存じます。裏面の糊塗工作は到底永續すべきものではありません。政府も軍部も政黨も經濟人も國民一般が和合一體となりて赤誠を盡すべき秋ならずや。今日は常識と協調



とが缺乏し獨善主義の小乗が害を爲して居るにあらざると存じます。南洲翁の所謂「三軍心を合せ「誠」を固ふせば向ふ所必ず克つ」ものであります。

若し今日の姿を忌憚なく述ぶることを許さるゝなれば萬機公論に決するの大義大局に立脚して貴族は特權維持に囚はれず、富豪は大家の夢に耽らず、官僚は昔式の權柄や獨善主義を以て民衆に臨まず、軍人は分を守りて敢て犯さず且つ今日の戦争は單に武力のみならずを覺らしめ、政黨は黨派心を去り眞に國家の大公人となり、國民は自己中心の私を去りて社會奉仕の觀念に就き、互に意思を酌み合ひ互に其の立場を理解し敢て面目論に拘泥せず、坦懷克く互讓の精神を本として禮儀を以て相手方を尊重するならば決して末梢的對立抗爭となることなしと存じます。畢竟自分の「誠」を人の心に移すの熱意と眞意があるならば何事も公明正大に圓滿なる解決を爲すを得て眞に命令一途、舉國一致の實を擧げ以て克く國威を中外に發揚するに至るべしと信ずるのであります。要するに億兆心を

一にし大義名分を守り至誠以て皇運を扶翼し奉ることを最終の目的として謬らざるに在りと存じます。

人或は曰はん一瀨の説く「誠」は古臭い道學者の口にするところにして碎牙の世の中に於て今人の耳を傾むくるところにあらずと、然らば天地も日月も年々歳歳變らずして古臭きにあらざるか、又曰はん今日は人力車の時代にあらずして自動車時代なり一顧の値ひなしと。然るに何んぞ知らん其の自動車の世となればなる程最もより良き道を選ばざれば危険の頗る多きことを、即ち道は一にして不二なり古今東西の別なしと御注意申上げて敢てお答と致します。

凡そ革新を唱へ國家の大事を成さんとする者は、金も要らぬ、名も要らぬ、命も要らぬといふ人にあらざれば遂行の出來ざること以上の話中に申上げました偉人の言行を見ても正さしく歴史の教ゆる處であります。即ち何事も人に在り結局は唯「誠」に歸一するのであります。併し物に本末あり事に順序あり又政治を



行ひ事業を興すには經濟と離るべからざることは申すまでもなく、「誠」さへあれば金錢を顧みるに足らずと申すのではありませぬ。勿論個人的には自我的の物慾を戒しむるとも、公私の經濟に於て「誠」の道に立つて大いに強く明るく經濟を講ずべしと唱ふるものであつて、それ故に私は力強き「誠」を叫ぶのであります。人は兎角僅か一步の違ひで道を誤り千里の差を生じ易いものでありますから、茲に平生の修養と常識の涵養とを必要と致します。修養とは道に従ひ知見を弘め自己を正しき高め信念を固むることを言ふのであります。

## 明治天皇の御製に

ともすればあらぬかたにも履み迷ひ

教へ難きは人の道なり

目に見えぬところに神の裁きあり、聲なきところに大衆の批判あり、蓋し大衆は茫たるが如くにして決して然らず、私心なく靜かに中正を持して最も賢なり。

畏るべきは此の無形無聲であります。因果應報の理亦空しからず。汝に出でたるものは汝に還る。十目の視る處十指の指す處夫れ嚴なるかなであります。破壊は易く建設は難し、守成に至つては更に難し。天地は正大にして國家は悠久なり。制度必ずしも人を制せず、人能く制度を制す。「天」なる哉「人」なる哉「誠」なる哉であります。願くは人となれ、眞の人となれよであります。然るに歐米人は評して曰く今や日本は人の缺乏であると私も斯く感ずるものであります。深く味はざるべからずと存じます。茲に根本問題として教育刷新の急を訴ふるのであります。尙眞に日本人としての活きた教育を施すならば司法、警察費及慈善費其他の諸經費を減ずること量るべからずと存じます。更に國際間に就て言へば莫大なる軍事費を減ずるものと存じます。

「誠」は正しき心の實在にして神と共に在り、大自然の理法に適ひ最も明らか

に最も力強きものと信じます。之が道德の主基であり同時に人間の大本であり國



本でありと信じます。即ちこれぞ洵に國運隆昌の礎であります。

「誠」は生きものにして表現の方法も異なれば又其場所に依りて千變萬化の姿を現はすも、其の「誠」の根本は天理の本然に歸一する鞏固なるものでなければなりません。其の精神さへ堅き連絡があれば、たとひ國民各自の歩む道が異つて居つても「誠」の道に變はりなく悉く我が尊嚴なる國體に基く國民精神の宣揚となるのであります。

天地萬物と共に呼吸し、潮の差引と共に生死し、花開き花落ち實結び實熟し、日月四季の循環するは皆是れ自然の法則にして、人も亦不言の自然に従ふべく自然は實に「誠」の本體であります。

天言いはず四時行はれ百物成る

音もなく香もなく常に天地は書かざる經をくりかへしつゝ

天地の誠の道は其のまゝに柳は綠花は紅

最後に繰返へして申しますが、眞に世界の平和を望み人類の幸福を求めんとするならば「誠」を徹底的に實行するの外なしと存じます。所謂至誠一貫であります。世移り時變るも變らぬものは「誠」であり、太陽の如く浴く普遍的に光を放つものは「誠」であり、天地の隅々までも尊きものは「誠」であります。而して「誠」は率直に肺腑より出で、日常に即して何處までも強く生きて實行する「誠」でなければならぬと存じます。己れ「誠」なると同時に、人をも「誠」の鏡に懸けて見抜くことも亦必要であります。茲に互に自己反省を促がすこととなりませぬ。「誠」は天の道を人が行ふのであります。天は吾が心なり。吾れ天の欲するところを爲さざれば天亦吾が欲するところを爲さず。天日昭々豈畏れざるべけんやであります。

最後に重ねて一言致したきことは他にあらず、明治天皇の特に列聖に秀でさせ給ふたる所以のものは、折に觸れ時に當り「誠」を強く御示諭相成るのみならず、



之を御實行遊ばさせられ一步も「誠」の外に御出あらせられざりしに依ること、恐察致します。尙日本小なりと雖今日隆々と榮へ世界に誇りとするに至りたるは、古來神祖よりの清明なる「誠」に基き正義人道を奉じたるからと存じます。支那は大國なりと雖「誠」に反し正義に背きたるが故に年と共に衰退に赴き、英國は利害の打算に走りて漸次「誠」に遠ざかるが爲に權威も信賴も薄らぎ落潮の傾ありと見做さる、米國の富強は他に種々の原因あるも國民性としては寧ろ利害を捨つるも正義人道を尊ぶの感情に富めりと思はれます。

以上世界の氣勢に鑑みるも「誠」の有無は實に興廢の依て岐るゝ根元となる。如何に以て「誠」の力の偉大なるかを知るに足れりと存じます。天衣は無縫であります。

野人禮に嫺はず、或は矩を越へ言ひ過ぎたる點もあり、反覆冗長に流れたる處もあり、或は物足らざる點も多々ありましたでありませうが、私は「誠」の鏡よ

りして世相を覗きたる直感に基き、如何に「誠」の缺如し居るかを嘆じ其の反省を求めたる次第であります。請ふ言辭の末を咎めず其の趣旨精神のあるところを容れられんことを御願ひ致します。

さはあれ翻つて我が國內外の情勢を大觀すれば、内に政治の強き中心なく不統一の不安あり、外に脅威を感じずるものあり内憂外患交々到り深憂忡々浩嘆に堪えざるの思があります。誰か一身を捧げて此の難局を引受け國家を泰山の安きに置く眞劍勇猛の人士出でざるかと乾天に雲霓を望むの音ならざるものありと存じます。茲に於て政府も軍部も政黨も國民も對立抗爭を慎み小異を捨て、大同に就き眞に舉國一致の實を示し同心一體となりて一定の恒久性ある國策を樹立し憲法の條章を恪循するは勿論、維新の五箇條御誓文の聖旨を奉戴し、又教育勅語を遵守し、我が國特殊の大國民として至誠奉公の實を示すべき重大の秋なりと存じます。此の時弊の矯正と覺醒とは結局「祖先に還れ」でありまして祖先忠魂の精神